
IS インフィニット・ストラトス ~Fatal Striker~

天上のヒカリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 〈Fatal Striker〉

【Nコード】

N6522R

【作者名】

天上のヒカリ

【あらすじ】

女性にしか反応しない兵器『インフィニット・ストラトス』
通称：IS。

そのISを世界で唯一使える男『織斑 一夏』の存在が世界中に知れ渡り、彼がISの操縦者を育成するための学校・IS学園に強制入学されてから、約一カ月後 新たにISを使える男が出現した。その名は『新永 四季』。彼はなんと一夏の親友であった！
二人の主人公が同じ舞台に立つ時、新たな物語が始まる！

ISのヒロイン達をオリジナル主人公とカップリングさせることはありません。

他の作品から知識や用語などを用いたりするかもしれませんがご了承ください。

本作品は原作者：弓弦イズル様の『インフィニット・ストラトス』の二次創作再構成物となります。オリジナル主人公&オリジナル設定が苦手な方はブラウザをバックしてください。

開始は五月上旬。原作で言えば、一巻のクラス代表戦直前です。

本作品は一夏と四季のW主人公で話を進めていく方針です。

原作キャラがおかしくならないよう、執筆していきますが、崩れていたら指摘してください。全力で直します。

Prologue - 1 『少年と悪戯兎の邂逅』

「一夏が羨ましすぎる！」

五月の連休 ゴールデンウィークの最終日。

高校の友人達と街で遊ぶ約束を交わし、ボーリングやカラオケで十分に満喫、日が沈み始める頃に解散。

その帰宅途中、中学時代からの付き合いであるバンドナを頭に巻いた赤毛長髪の友人 五反田 弾が俺の隣で本日四度目となる愚痴を朱に染まる空に向かって叫んだ。

大声で叫ぶため、嫌でも注目を浴びることになる。周りの歩行者がこちらを見る視線が痛い。

途中までの帰り道が弾と同じであるため、嫌でも同じ方向を歩くことになる。

「……またそれか。何回言えば気が済むんだ」

他人の振りをして隣を歩く男から距離を取るべきかと頭の隅で考えつつ、俺は呆れ口調で答えた。

「四季、お前は男として何も感じないのか！？ 女の園、つまりはハーレム！ 男の永遠のロマンだろうが！」

「熱く語られても興味ない」

「一夏のアホといいお前といい、何でもいつもそうなんだ。普通興味あるだろ。 ハッ、まさか、お前ら……男にしか興味が」

ガンッ

それ以上戯言を言わせないよう、先に殴りつけておく。

「殴るぞ」

「ぐお……殴つてから言つなよ……」

俺達が今口にしている一夏とは、IS学園に通う友人の『織斑一夏』のことだ。

女性にしか扱えない兵器

インフィニット・ストラトス
IS。

とある天才科学者が十年前に発表した宇宙空間での活動を想定して開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目を浴びなかったそれは、ある事件をキッカケに全世界の人々がその存在を知り、認めることになった。

しかし、ISが現代兵器全てを凌駕する圧倒的な性能を持っていることから当初の目的である宇宙進出から飛行パワード・スーツとして軍事転用へと切り替えられ、現在では各国の抑止力の要として使われている。

後に日本のIS技術の独占に危機感を募らせた諸外国はアラスカ条約 正式名称『IS運用協定』を制定、ISの情報開示と共有を定めた。同時にISの軍事利用は禁止され、表向きは競技種目として落ち着いた。

そのISの操縦者を育成するために設立された特殊国立高等学校『IS学園』はISが女性にしか扱えないため、必然的に女子高等学校の扱いとなる。

ところが、今年の二月。

私立藍越学園の入試を受けに試験会場に向かったはずの一夏が、何故かIS学園の試験会場と間違え、何故かテスト用ISを動かしてしまい、何故か試験に合格してしまった。

結果、一夏はIS学園の生徒として入学することになった。

それは同時に『世界で唯一ISが使える男が現れた』という世界の常識を覆す事実を示していた。

受験した翌日から、この事実はすぐに全世界に伝えられることになり、一夏の日常は一変した。

男がISを動かせるということは、『ISは女性にしか扱えない』という絶対の法則が崩れるということ。つまり、ISを動かした一夏を研究すれば、将来男がISを使えるようになるかもしれない。そうすれば、男女の関係は対等となり、男卑女尊社会を崩すことができる。

故に、遺伝子工学研究所の人間が一夏に原因究明の協力を要請してきた。

「是非とも生体を調べさせて欲しい」と。

当然、一夏は断固拒否。しかし、断られたからといって引き下がるはずもなく、研究者達は幾度も要請し続けた。

中には誘拐という強硬手段を企てていた連中もいたらしいが、それが行われる前にIS学園の関係者と名乗る黒服の男達数名が「君を保護する」と一夏にIS学園入学書を渡してきた。

一夏はわけが分からないと首をひねっていたが、黒服達の言葉の意味は分かる。

以前、どこかでIS学園はあらゆる国家機関に属さず、干渉されないと聞いたことがある。

IS学園にさえ入学すれば、誰も一夏に手出しできなくなる。ひいては一夏を守ることに繋がる。

そう、IS学園への入学は一夏を守るための最善にして唯一の方法なのだ。

まあ、国としては保護と同時に監視もつけたいのだろうが。

「女性に興味があるかないかというのなら、もちろん俺にもある。だからといって、一夏の今の境遇を羨ましいとは思わない。むしろ、

気の毒に思う」

「は？　なんでだよ」

「男子一人で、残りの生徒が全員女子。……分かるだろ？」

学園でただ一人、周りは女子で男は自分一人だけ。

好奇の眼差しを向けられるのは精神的にかなり辛いはずだ。
同情さえしてしまう。

「要するに天国ってことだろ」

「……」

予想通りの返答に再度呆れながら、しかし弾が五度目となる愚痴を
叫ぼうとしたので、それより先に拳で黙らせた。

後で聞いた話だが、試験会場を間違えた理由について一夏に尋ねて
みると、

藍越学園とIS学園って、似てるよな？　つまりはそういうこと
とだ。

いや、どういうことだ。

あまりに間の抜けた回答すぎて呆れて何も言えなかった。
人生を左右する大事な受験日に試験会場間違えとか普通ありえない
だろうが。

だがそこは一夏だから仕方ないと納得してしまう。
妙に捉えどころのない奴だからな……。

・ ・ ・ ・

弾と雑談をしながら歩くこと数分後。

五反田食堂と織斑家が丁度左右に分かれているＴ字路に辿り着く。

「じゃあな、四季。また学校でな」

「ああ」

別れの言葉を交わして、弾は実家である五反田食堂のある左の道へ、俺は織斑家のある右の道へと足を向けていく。

俺が織斑家に向かっていているのは、そこが帰るべき家だからだ。

俺 新永 四季は現在織斑家に居候として住んでいる。

経緯は覚えていないが、五年前、名前以外の記憶を全て失った俺を一夏の姉である千冬さんが保護。以降、千冬さんに養ってもらっている。

一夏と千冬さんは記憶のない俺を新しい家族として迎えてくれて、空虚だった俺の心に光を満たし、人間として生き返らせてくれた。俺にとって二人はかけがえのない大切な人達だ。

ちなみに千冬さんはＩＳ学園に勤める教師だ。そして、一夏はその生徒。

ＩＳ学園は全寮制で生徒達は寮での生活を求められている。一夏は前例のないものとしてだが、将来有望なＩＳ操縦者を保護するという目的もあるからだ。自身の国防のために、あらゆる国が学生の頃から優秀な操縦者を勧誘することがあり、それを防ぐためらしい。二人が寮で生活しているため、現在の織斑家での生活は俺一人で、

通う学校も普通の進学校だ。

一人しかいない家は三人で暮らしていた時よりも広く感じ、寂しく思わせる。

（別に寂しいわけじゃない。ただ、二人が遠くへ行ってしまったように思えて……）

仕方のないこととはいえ、自分がどうこう言っても三人で暮らしていたあの頃に戻るわけじゃない。

俺もいい加減大人にならないといけないな、と思いつつ、近道となる公園を通り過ぎようとした時だった。

誰もいない公園の中央で妙なものが生えていることに気づいた。

「何だ、これ……？」

『引っ張ってください』と書かれた張り紙の下の地面に生えたウサ耳。

それが妙なものの正体だった。

「……」

どう対処したのか、正直俺は悩んだ。

十中八九誰かの悪戯だろうが、未だこの状態だということは仕掛けて時間はあまり経っていないということなのだろう。

これが人に害を与えるものであるなら、このままにしておくのは危険だ。

万が一、近所の子供達が引っ張ったりして怪我などすれば大事だ。

ここは第一発見者である俺が処理するしかない。

「何も起きないのが一番なんだがな」

言いながら、俺はウサ耳を地面から引き抜いた。

が、何も起こらず、ただウサ耳が引き抜かれただけだった。

「……」

カーと頭の上で烏が鳴いたような気がした。

日本安全神話が崩れてきている今の世の中、危険な悪戯を平気で仕掛ける輩の仕業だろうと思っていたのだが、考えすぎだろうか。

キイイイン……。

その時、空から何かが聞こえてきた。

まるで飛行物体がこちらに向かって高速で落ちてきているような

ドカアアアン！

「っ！？」

ような、ではなく本当に物体が落ちてきた。しかも、先ほどまでウサ耳が生えていた場所にだ。

俺の目の前に落ちてきたものは人参だ。それも絵で描かれるようなイラスト風の人参。何だこれは！？

「あつはつはつは！ 見事に引つかかったね！」

ぱかっつと割れた人参の中から現れたのは、両腕を頭の上に挙げて兎の真似をする女性だった。

Prologue - 2 『そして、賽は投げられた』

「はぁーい、おつまたせー！ みんなのアイドル、束だよっ」

「……」

何かの冗談か夢だろうか。

ウサ耳を引っ張ったと思ったら、空から人参が落ちてきて、中から超ハイテンションな女性が現れた。

こんなファンタジーのような現実を誰かに話しても普通は信じないだろう。

「地面からと思わせて、空からやってくる。なんて素晴らしい引っ掛け。さすが私！ あ、これ返してもらうね」

割れた人参から出てきた女性は、未だ啞然とする俺の手からウサ耳を奪うと、それを頭に装着した。

「やっぱりこれがないと落ち着かないんだよね。別になくても束さんの天才的頭脳が損なわれるわけじゃないんだけど、なんていうかトレードマーク的な？」

……とりあえず、落ち着いて相手を見るんだ。

自らを束と名乗る目の前の女性の年齢は20代中頃。格好は、頭に先程のウサ耳、不思議の国のアリスのような青と白のワンピース。幼い雰囲気を持った端麗な顔立ち、しかし体つきは幼さとは対照的に大人へと成熟したもの。特に豊満な胸が、女性が大人であることを強調していた。

「ん？ どこ見てるのかな？ 私のおっぱい？」

悟られないように見ていたはずなのにばれてしまった。
決してやましい気持ちで見えていたわけじゃない。

俺は初対面の人間に対して、観察するような癖がある。それは相手の特徴を把握して、記憶するためだ。

何故このような癖があるのか説明するならば、俺が記憶喪失だからである。

記憶を失った俺にとって、『忘れる』ことは恐怖だ。

『思い出せない』『まさか、また記憶を失ったのでは』と単純に思い込んでしまう。

馬鹿馬鹿しい話だと我ながら思う。しかし、どうしても『忘れる』ことへの恐怖が拭いきれない。

だから、どんな些細なことでも記憶に刻み付けようと心掛けている。
忘れてしまわないように。

「やましい気持ちで見えていたわけじゃない……気分を害したのなら謝るが」

「んー、別にいいよ。減るもんじゃないし。もっと見たいんなら見せてあげるよ」

むにゅ、と自分の両手で大きな乳房を掴んで谷間を作って、俺に見せるようにして胸を差し出してきた。

さすがに何度も胸が見えてしまうと、男として意識せざるを得なくなってしまう、顔に熱が帯びるのを感じながら、女性の胸から目を背ける。

この女性には羞恥心というものが無いのだろうか。

「……結構だ」

「にやはは、その初々しい反応、まるでいつくんを見てみたいだよ。それでいて、表情を崩さない辺りがちーちゃんにちよつと似てるかも。なんていうか、ちーちゃんの男版みたいな？　おお、想像したらなんかカッコいい！」

一人で何か盛り上がるウサ耳の女性。悪人ではなさそうだが、変わった人であるのは間違いない。

普通なら『変人』と判断して、すぐに逃げるべきなんだが……何故だろう。この人からは決して逃げられない気がする。

さらに言えば、この女性からは何も読めない。表情や仕草、言葉などから何も読み取ることができない。否、言葉で表せない。こんな事は初めてだ。この人は一体……。

「そんな怖い顔しないしい。今日は君にプレゼントしたいものがあるんだから。新永 四季くん」

！？

「何で俺の名前を」

知っている、と続きが言えなかった。それより先に女性が空に指差して声を上げたからである。

「さあ、空を見上げてご覧！」

彼女の言葉につられるように上を見上げると、朱から夜の闇へと変わりつつある空と、闇の中に光る星々の光。そして、こちらに向かつて落ちる飛行物体。

なっ！？

ズーンッ！

女性が乗っていた人参よりも激しい衝撃が俺達の横で起きる。それはとてつもない重量の物体が落下してきたことを示していた。銀色のそれはコンテナボックスのような形をしており、ボックスの側面に『ふれんぜんと ふぉー しーくん』という文字が刻まれていた。

「『四季くん』じゃ長いから、次からは『しーくん』って、フレンジーに呼ぶね。私のことも『らぶりい東ちゃん』って呼んでいいから」

いや、長くもないし、文字数も変わってないだろう！？

いかん、どうも先程から非現実的なことばかり起こり続けているせいか、思考が追いつかない上、調子も狂わされている……。だが、そんな俺を他所にらぶりい東ことウサ耳女性は言葉を放つ。

「さて、活目せよ！ 私がしーくんのために作ったIS！ その名も『煌星^{キラホシ}』！」

「」

今なんて言った？ 作った？ ISを？

聞き間違いではないだろうか、と尋ねようとした時、コンテナボックスの壁が四方に開かれ、コンテナボックスの中身が露わになる。

露わになったそれは、間違いなく各国の主力となっている最強の兵器 ISだった。

テレビや新聞などで何度も見かけたことはあるが、現物を間近で見るのは初めてだ。

しかし、目の前にあるこの銀灰色のISは初めて見た気がしない。
まるで、長い時を超えて再会したかのような、そんな感覚。

「驚いた？ 驚いたよね。というわけだからで、しーくん。今から
フォーマット フィットティング
初期化と最適化を行うから乗ってね」

「……ちよつと待ってくれ」

次々と起こる思いがけない事態に動揺している自分自身に驚きを隠せない。

自分が自分に驚く、というのは変な言葉だが、俺を知る人が見れば、きっと驚きを隠せないだろう。

以前はどうだったか知らないが、記憶を失って以降の俺は一度も人前で動揺する姿を見せたことがない。家族である一夏や千冬さんにもだ。

だが、そんなことを考えるよりも今は、

「このISをあなたが作った……？」

「うん、そうだよ。紛れも無く私のお手製」

確認するように彼女に問いかけるが、女性は満面の笑みで即答した。

「……信じられない。けど、この状況はあまりにも ……束？」

言いながら、ある女性の名前が頭に浮かび上がった。

十年前にISの存在を世に出した天才科学者 篠ノ之 束。

「まさか、あの篠ノ之 束……なのか？」

目の前に立つ女性がその人なのだという事を今更ながら悟った。

「ピンポンピンポン！ 正解だよー。やっと気づいてくれたね、しーくん。束さんはすごく嬉しいよ」

何がそんなに嬉しいのか彼女 篠ノ之博士はぴょんぴょんと兎のように跳びはねて喜びを表していた。

対照に俺はガツクリと頂垂れた。

ヒントはいくらでもあったのに、今にようやく気づいた自分の愚鈍さに呆れるしかない。

確かに、直前に色々ありすぎたが、それとこれとは別である。

「……でも、これがISだとしたら、俺には関係のない代物だ」

「ISが女性にしか動かせないから？」

「そうだ。そんな分かりきったことをどうして」

言いながら、俺は何気なくISに触れた。

先程の感覚に関係なく、動くかどうか確かめるわけでもなく、何も考えずに鈍く光るISの装甲に触れた瞬間 俺の世界が変わった。

Prologue - 3 『煌星起動と訪れる戦い』

「!？」

キンツと金属質の音が頭に響くと、すぐに膨大な量の情報の奔流が意識に直接流れ込んできた。

ISの基本動作、操縦方法、性能、特性、装備、活動時間、行動範囲、センサー精度、レーダーレベル、出力限界、etc……。

触れる前までは知りもしなかったありとあらゆる情報が今では熟知しているかのように理解・把握できる。

気がつくと俺は導かれたかのように自然とISに乗り込んでいた。

スキンバリアー
皮膜装甲展開。クリア。

スラスター
推進機正常作動。クリア。

ハイパーセンサー最適化。クリア。

アーマー装甲展開。クリア。

近接ブレード《名称未設定》。待機。
システムオールグリーン
全機能異常無し。

『煌星』アクセス完了。起動開始。

視覚野に接続されたハイパーセンサーを通して、視界にパラメーターが浮かび上がる。

解像度が上がったかのように映されるクリアな世界。

感覚が普段とは比べ物にならないほど広く鮮明な領域まで引き上げられている。

一夏が言っていたISに初めて触れた時に訪れた“電撃のような感覚”。

聞いた時はよく分からなかったが、今なら分かる。

「それじゃ、ぱつと済ませちゃうね。ほいほい、ほいっと」

篠ノ之博士がコンソールを開き、空中投影ディスプレイと空中投影キーボードをそれぞれ六枚ずつ呼び出す。そして、画面に表示された膨大なデータに目配りしながら、同時にキーボードを叩いていく。いや、叩くというより、それはハープを弾くかのような滑らかで無駄のない素早い動きで、数秒単位で切り替わっていく画面のデータを一つずつ確実に処理していった。

初期化と最適化が終了しました。

『煌星』再起動。

カツ　！

俺を包んでいたISが粒子となって弾けて消え、しかし瞬時に体に包み込む。

光が収まるとそこに現れるのは、より洗練された形に成されたIS装甲を纏う俺自身。

「これで、この子は世界で君だけのISになったよ」

厚みを増した装甲に加え、内部フレームが強化された両腕部と背部。
ブースター
背面と両肩の加速装置と姿勢制御装置が付けられた肩装甲の可変翼。
スタビライザー
先程までの無骨だった煌星の姿形が明らかに変わった。

「見事に近接戦闘に特化した機体だねえ。しかも、パワー重視。まあ、私がそうなるように設計したんだけどね」

近接特化ブレード『宵之明星』。よいのみようじょう量子展開準備完了。

ウィンドウに表示される煌星の武装。

日本刀の形を模したIS専用の武器が主の命を待っている。
俺の意思次第ですぐにでも量子展開されるだろう。

「おお、起動してすぐなのに、もうフラグメントマップが構築されてる。初期段階だけど、見たことのない形だね。ふっふっふっふっ、どんな進化を遂げるか実に楽しみだよ。今度いつくんのも見せてもらおう」と

煌星のデータが表示されたディスプレイを見ながら、ぶつぶつと用語を呟く篠ノ之博士。

男性のISのデータがそれだけ珍しいということなのだろうか。

.....ちよつと待て。

流されるままにISに乗って機動させてしまったが、これはマズい。男がISを動かした。

これがどういう意味を示すのか、それが分からないほど俺の頭は鈍っていない。

俺は 『世界でISを動かせる男』 になってしまった。

「篝ちゃんといっくんとちーちゃんとせつちゃん以外の人間にここまで興味を持ったのは初めてだよ。何でだろうね？ 他人に興味を持たない私が一度会っただけの君に興味を持つなんて、可笑しいね。何の接点も無かったのに」

何を言っているのだろうか。

今の自分の状況に動揺しているせいか、彼女の言葉があまり耳に入らない。

そんなことより、ISを動かした時点で浮かんでいた疑問をようや

く口にした。

「どうして、俺がISを使えるんだ……？」

その問いかけに篠ノ之博士は分からないという身振りで答えた。

「どうしてなのか、私にもさっぱりぱりん。まあ、人生何が起くるから分かんないからね、こういうこともあるよ」

あつてたまるか、と頭の中で突っ込めるほど、いつの間にか思考は回復していたらしい。

よし、今度こそ詳しく説明

「さてと、そろそろ私は行こうかな。うるさいのが来そうだし。じやあね、しーくん、また会おうね。ばいばい」

と思った矢先、彼女は学校の友人と別れるような軽いノリで告げてきた。

「なっ、待つ
」

ズンッ！

去って行こうとする彼女を呼び止めようとした瞬間、背後から重い衝撃音が響いた。

何かが落下したのだろうか、と思い、後ろに振り返ってその先を見る。訂正、落下物ではなく、そこには何かが降り立っていた。ウィンドウに表示されたデータが降り立ったものの正体を詳しく教えてくれた。

警戒。後方に熱源反応。データ照合確認。

オーストラリア第三世代型IS『ブレード・ガンナー』。

IS……！？

装甲の色はライトグリーンで、外見が機動性重視とした細いフォルムが特徴的なISだった。

右手にはビームライフルが装備されている。

「何でこんな所に！？ 篠ノ之はか　　って、もういない！？」

少し目を離れた間に、彼女は何処かへと消えてしまっていた。

最初から最後まで、よく分からない人だ……。

（くっ、いなくなってしまったものは仕方ない。それよりも今はこの状況をどう切り抜けるかだ……！）

IS運用規定では有事における国防の場合や指定された場所に限り、ISの使用を許されている。

現在無許可で登録もされていないISに乗ってる俺が国を脅かす犯罪者に間違われてもおかしくない。

今思えば、ここは町の中にある公園。

俺と束さん　不審者二名のやり取りを誰が見ていてもおかしくはない。そもそも、こんな所でISを動かしていたら、警察に通報されるのは当然の対応だろう。

ISに勝てるのはISだけ。

一機でもあれば国家を転覆させられるISを使う犯罪者が現れたのなら、同じ力を持つISを以って対処しなければならない。

この場合、市民からの通報受けた警察が自衛隊　いや、この場合IS学園に要請したと思われる。

IS学園ならば、どの国家や組織よりもISを所有している上、教師を勤める人間は各国の代表やIS大会の上位に入る者達ばかりと聞く。

（あのISに乗ってる人は国の要請を受け、俺を制圧するために送られたIS学園の人間である可能性が高い。なら、事情を話せば分かってもらえるはず……）

分かってもらえなかった場合、千冬さんに会わせてくれるようお願いするしかない。

彼女にあまり迷惑を掛けるようなことは避けたいのだが。

しかし、そんな俺の考えを裏切るかのように、相手が右手のビームライフルをこちらに向けた。

「!？」

警告。敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認。エネルギー装填。

ウィンドウに表示される警告に慌てて身構えるが、もう遅い。敵ISのライフルの銃口から閃光が放たれる。

瞬間、初動作が遅れ、全く動けなかった俺の視界は白一色に染まった。

P r o l o g u e - 4 『大空の剣銃士ヘブレード・ガンナー』 (前書き)

タイトルの不足気味と思ったので文章後半を付け足しました。
…… 最初投稿した時、何故ここまで書けなかった。

Prologue - 4 『大空の剣銃士ヘブレード・ガンナー』

ドオンッ！

「ぐあっ！」

バリアー貫通。首部着弾。『絶対防御』適応。

ダメージ233。エネルギー残量517。

実体ダメージ、軽微。

ライフルの銃口から放たれた白いレーザーは俺の喉元に直撃した。ISのバリアーを貫かれたが、操縦者保護機能『絶対防御』のお陰で体に怪我や熱傷は一切ない。だが、レーザーの直撃と同時にやってくる衝撃までは防げず、神経を通して凄まじい痛みが首周辺に伝わってきた。

首から上が吹き飛んだのではないかと一瞬錯覚したほどだ。

『絶対防御』が無かったら、と一瞬だけ『もしも』を想像してゾツとするが、それを即座に頭から切り離す。

今優先すべきは怯えることじゃない。こちらの意思を相手に伝えることだ。

「ゲホッ 止める！ こっちに攻撃の意思はない！」

すぐに通信回線を開いて、相手に攻撃を止めるよう呼びかけた。
オープン・チャンネル

呼びかけの時には、既に相手は第二射の態勢を構えていた。

「男の声……？」

俺の声に反応した操縦者がライフルの第二射を中止した。

ライフルの銃口内に溜まりつつあったエネルギーの発光が徐々に消

えていくのが確認できた。

俺の声に反応して止めたというより、“男”の声に一瞬戸惑ったという感じだ。

「どういうことだ。何故男がISを動かしている？」

「いや、何故と言われても……」

俺自身が分かっていることを答えられるわけがない。

「貴様は何者だ？ 篠ノ之博士はどこへ行った？」

さつきから妙だ。警告も無しに撃つたり、この場にはいない篠ノ之博士のことを聞いたりして……本当にIS学園からやってきた人なのか？

操縦者をよく見てみる。

藍色の髪、吊り上った目、猛禽類のような得物を狙う瞳、他者を寄せ付けない雰囲気。動物で例えるなら鷹と思わせる。

「チツ、目標の博士は既に見えない、か。BG、ホークだ。今すぐこの辺りを中心に広範囲探索しろ。今なら、まだ捉えられるかもしれない。私は博士が造ったと思われるISとその操縦者と遭遇した」

そんな俺の疑問を他所に、向こうは誰かと連絡を取り合っている。どうやら、プライベート・チャンネルで通信を取っているようだが、チャンネルを切り替え忘れていいのか、相手の声が丸聞こえだった。内容はよく分からないため、あまり意味はないが。

とりあえず、今相対している相手の名前。コードネームと思われるが『ホーク』ということだけは分かった。

「そうだ。IS回収後、そちらと合流する。時間がない？大丈夫だ、問題ない。こちらはすぐに終わらせる」

ファルケンと名乗るIS操縦者は通信を終えると、再びこちらに敵意を示し始めた。

「私はあまりニュースを見ないが、やっと思い出したよ。ISを動かしている男……なるほど、お前が例の『世界で唯一ISを動かせる男』 織斑 一夏か。そして、そのISが篠ノ之博士が直接開発したというIS『白式』だな」

「……は？ いや、俺は」

一体何を勘違いしているのだろうか。

確かにISを動かせる男で全世界に知られているのは一夏だけで、今さっき動かしたばかりの俺のことを一夏と勘違いしてしまうかもしれない。

しかし、いくらなんでも早合点ではないだろうか。

「篠ノ之博士を捉えるために、危険を冒してまでこんな東洋の地まで来たというのに直前で目標に逃げられるとはな。このまま手ぶらで帰るわけにもいかん。なら」

警告。敵ISが射撃体勢に移行。高出力弾丸エネルギーの装填を確認。

「そのIS、奪わせてもらおう」

当然のようにブレード・ガンナーのビームライフルを構えながら、

言い放つホーク。

……何故そうなる？

「おい、さっきから勝手なことを」

「大人しく渡せば命までは取らない。私としてもその方が早く済ませることができて助かる」

……こいつ、自分は発言しておいて相手の言い分は全て無視する自己中心タイプか。

厄介だと思うと同時に、何を言っても無駄だと諦めもする。

しかし、ホークと話していて二つ確かなことがある。

一つは、相手が軍やＩＳ学園関係者ではなく、何処かの組織に属する者　テロリストであること。

もう一つは

「残念ながら、こいつは既に初期化と最適化を済ませて俺専用の機体となっている。量産機と違って、登録者以外使えないはずだ。……それに引き渡したところで、俺を殺すつもりなんだろ？」

ホークは“『戦い』”という名の狩りを楽しみ、命を奪うことに快感を覚える”人物であることだ。

『命までは取らない』と言った時のこいつの表情が明らかに嘘で塗り固められた作り笑顔で、その言葉に真意が全く込められていない。まるで映画やテレビで敵役がよく使うお決まりの台詞のようだ。

「……くつくつくつ、この状況で命まで取らないと言われても信用できないのは当然だな。信用するとしたら、そいつは救いようのない馬鹿だ」

こちらの返答に対し、ホークは愉快に笑っている。
全然笑えないこちらとしては不愉快以外の何物でもない。

「私の敵でいてくれて礼を言おう。これで狩りを楽しむことができる。あまり時間がないのも確かだがな」

ドウッ！

高出力のレーザーがライフルから放たれる。

だが、来ると分かっているものなら避けることはできる。

バッシフ・イナシヤル・キャンセラ

エアスライド

PICを働かせて、機体を浮遊。右方向へと空中水平移動
回避
する。

ドゴオオンッ！

直後、俺の後方で爆発が起きる。

レーザーは公園内の地面を抉り、衝撃で土砂を吹き飛ばした。

ドウッ！ ドウッ！

ファルケンは続けて第二射、第三射のレーザーを放つ。

俺は移動を続けながら、それらを回避する。

しかし、回避した第二射は公園内のトイレを、第三射は遊具の滑り台を破壊した。

（ここで戦い続けると、町にも被害が出る……！ 一度、空へ
！）

即座に行動を開始。

機体の推進翼を点火。煌星を垂直方向に上昇・加速させる。

飛ぶ。人間が自力で向かうことのできない空へと。

加速による操縦者へのGによる影響はほとんどない。ISの操縦者

保護機能を守ってくれているからだ。

このまま、距離を取って、逃げる　　！

「このブレード・ガンナーを相手に空へ逃げるとはな！」

ホークもブレード・ガンナーの推進翼を点火させ、俺を追って飛行を開始する。

しかし、そのスピードは凄まじいものだ。

こちらが先に飛んだはずなのに、追い越し、俺の前に回りこんできた。

「くっ！」

予想以上に煌星の速度は遅かった。

機体の特性や仕様上、ある程度は覚悟していたが、これでは逃げられない。

「ただ逃げるだけじゃ、獲物としては三流以下だ！」

直後、俺に降りかかるレーザーの雨。

ホークがライフルを連射させて撃ってきたのだ。

俺は流れレーザーが町に行かないよう、ブレード・ガンナーの位置より上へ移動。そして、腕を交差して防御。

逃げられないのなら、防御に専念するまでだ。

右腕装甲、右肩部、両脚部、数十箇所被弾。

総ダメージ86。エネルギー残量431。

機体損傷度レベル低。戦闘行動に支障なし。

思った通り、急所に当たらなければ問題ない。それに煌星の装甲の

お陰でダメージもかなり軽減されている。

これならば耐えられる！

「防御に専念して、軍が来るまでの時間稼ぎか……私が最も嫌う戦法を取るとはなあ！」

こちらの防御態勢に苛立ったホークはビームライフルを量子分解して下げ、代わりに一本の近接ブレードを呼び出した。

何をするつもりだ、と思った直後　ブレード・ガンナーの形状が変化した。

鳥が翼を広げるかのように、肩アーマーに格納していたと思われる高速飛行ウイングが左右に展開されていく。

敵IS、高機動モードへ移行。

「『チャージ&アサルト』。レディ」

ヒュッ

一瞬の風きり音の後、防御で交差していた両腕部の装甲が切り裂かれた。

「ぐっ……！　装甲が切り裂かれた！？」

ダメージを受けているとはいえ、レーザーに耐えた煌星の装甲を容易く切り裂くなんて、普通の近接ブレードじゃない。

両腕部表面装甲損傷。小破レベル。

ダメージ101。エネルギー残量330。

敵IS兵装検索。

検索完了。グレイヴ社の近接武装『高周波振動刃SB-042

ソニック・ブレイズ』。

俺の疑問に答えるかのように、ディスプレイに敵ISの武器データが機体の状態と共に映し出される。

振動剣　高周波振動発生器でブレード部分を超高速振動させ、切れ味を増大させる兵器。

SF系の漫画や小説などで登場する架空の武器だが、現実存在し、その実物と威力を目の当たりにすると恐ろしさを感じる。

超音波を用いた技術自体は、主に医療分野で活用されているのだから珍しくはないが、今では兵器の技術としても普通に使われるようになった。

振動剣に限らず、ビームライフルや近接ブレードなどを見ると、ISの登場は確実に人類の科学技術を飛躍的に発展させた。特に兵器分野においては異常とも言える程の速度で。

そこでようやく、俺が篠ノ之博士に感じていた“言葉で表せない”ものの正体を、全てではないが少しだけ悟った。それは

ブオッ！

「ッー」

左から強い衝撃が襲い掛かった。

ブレード・ガンナーの振動剣による斬撃と超高速スピードで発生した衝撃波だ。
ソニック・ビーム

二重の攻撃は煌星を左方向へと大きく弾かせた。弾かれた後、切断された左肩アーマーの一部がバカッと割れて、地上へと落ちていく。

左肩アーマー損傷。実体ダメージレベル低から中へ。

（そうだ、今は実戦中だ……！ 他のことを考えてる場合じゃない！）

ザンツ！ ザンツ！ ザンツ！

意識が別の方向に向かっていった間に煌星の装甲は何度も切り裂かれ、受け取った時の面影はもうない。

前後左右、縦横無尽に空を飛び、獲物を狩る鷹の如き動き 『チ
突撃
ヤージ& amp; アサルト』とはよく言ったものだ。

そして、これがブレード・ガンナーの基本的な戦法なのだろう。高い機動力を以って、相手を翻弄し、状況に応じて剣と銃 斬撃と射撃で確実にダメージを与えていく。

（このままじゃ、装甲とエネルギーを削られる一方だ……！ なら
）

《宵之明星》展開。

俺の右手に一本の日本刀の形を模したブレード 《宵之明星》が量子展開される。

ブレードの柄を両手で握り締め、その感触を確かめた後、即座に構える。

剣を構えた時にはホークはこちらに超高速の突撃を仕掛けていた。

「はあっ！」

いくら速くても、直線的な動きなら読めるし、タイミングも計れる。さらに言えば、このスピードなら急な方向転換もできないはず！
いける、と思った俺は剣を上段から全力で振るった。
しかし、斬ったのはブレード・ガンナーではなく虚空だった。

何故か。理由は簡単だ。突進の勢いを殺さないまま、円状に軌道を描くように右方向に回避　そのまま、俺の背後へ移動したからだ。

「なっ……」

「素人が、それで攻撃のつもりか？」

ホークは機体の推進翼を点火させ、超高速移動による斬撃を再開させた。

ザンツ！

「ガッ　！」

背部に伝わる斬撃の衝撃。

完全無防備な状態で受けた攻撃。その結果

ダメージ167。エネルギー残量94。

背部加速装置損傷。加速出力20%減。

エネルギー残量が100を切った……！

ISが展開している間は絶対防御が操縦者の命を守ってくれる。だが、シールド・エネルギーが切れ、機体のダメージ量が限界を超えれば、ISは強制解除される。

そうなれば、絶対防御も何もない。

ギンツ！

「……！」

右から迫る超高速の斬撃をかるうじて弾いた。

何度も受ければ、攻撃を流石に受けるタイミングも掴めるようになる。だが、その場しのぎにしかない上、三回に一度防げるかどうかのものだ。

延々と繰り返される高速移動と斬撃。

誰の目から見ても明らかかなワンサイドゲーム状態だ。

このままでは、俺に待つのは死だけだ。

（俺は死ぬのか？）

……ふざけるな。死んでたまるか。

こんなわけの分からないまま、何もできないまま終わってたまるか。
名前以外全てを失った俺を家族として迎えてくれたあの二人にまだ何も返していない。

（だから　！）

俺は最後の賭けに出た。

Prologue - 5 『The First Strike』

（　　そろそろ終わりにするか）

防御に徹底していた敵が、反撃をしてきたということは軍の到着よりも先にシールド・エネルギーが尽きると考えたのだろう。

その判断は間違っていない。

この場合、下手に防御し続けるよりも攻撃をして敵にダメージを与えるのが有効だ。ダメージを負えば、怯むし、警戒をして距離を取る。

しかし、それは互いの技量に差が開きすぎていなければの話だ。

不利な状況だからといって、無闇に攻撃を仕掛ければ逆にカウンタ―を受け、更に痛手を負うことになる。

それならば、まだ防御をしていた方がマシではある。

ホークにとって、今の状況は詰み^{チェック}であった。

（つまらない）

篠ノ之博士が開発に関わったという新型のIS『白式』。

どんな性能を秘めた機体かと期待していたのだったが、いかなせん操縦者が素人すぎた。

日本のことわざでいう『猫に小判』　どんなに優れたISでも操

縦者が下手では、役に立たないもの。

『世界で唯一ISを動かせる男』も名ばかりの存在だったと、ホークは失望し、期待していた自分が愚かだったと思い始める。

しかし、そのどちらも自分の勘違いだということに彼女は気づかない。

トドメを刺すために、彼女が空中アクセルターンし、機体を再加速

させようとした その時だった。

「！」

ホークの眼前に黒銀のIS ホークは白式と思い込んでいる
がこちらに向かつて猛スピードで突進してきていた。

それは両肩と背面の加速装置を最大噴射させたことで得た爆発的な
加速力。
ブースター
フルブースト

姿勢が崩れないよう左右に開いた両肩の可変翼がバランサーの役目
となっているため、急激な加速の影響もなく一直線に向かつてきて
いる。

これはIS操縦者の多くが相手との間合いを詰める時に使われる技
能の一つ

イグニッション・ブースト
(瞬時加速……！)

高速移動を続けるためにアクセルターンの後、加速できるよう推進
翼は常に火を噴いており、アクセルターンによる減速中でも動きは
止められない。

無理矢理止めようと思えば止められるが、機体と操縦者に負担が掛
かる上、数秒間身動きが取れなくなり、確実に無防備な状態を晒す
ことになる。

互いの距離も絶妙な具合で開いている。近づきすぎれば機体同士が
接触して攻撃は失敗、逆に遠すぎれば敵の行動選択に余裕を与える。
タイミングと距離 これらの条件は四季の『奇襲攻撃』の条件を
満たしていた。

悔どりすぎたとホークは自身を恥じた。

恐らく反撃に失敗した時にこの奇襲攻撃を考えていたのだらう。

反撃失敗の後も諦めず不器用に防御をし続けていたのは、奇襲の機

会を計るためのもの。

敵は攻撃を受けつつも、逆転の策を講じていたのだ。

ブレード・ガンナーの装甲は機体の特性上、通常のISよりも装甲が若干薄い。

単なる近接ブレードによる斬撃ならば問題はない。

だが、『宵之明星』の特性が不明である以上、下手に受けるわけにいかない。

もしあれがバリアー無効化攻撃を備えている武器だとすれば、一撃で落とされる可能性がある。

無論、バリアー無効化攻撃を有する兵器は数少ない。

ISの絶対防御を発動させて、大幅にシールドエネルギーを削ぐことのできる強力な能力だが、使い勝手が悪く、使い手を選ぶ上、武装を格納させる拡張領域バスロットの容量をほとんど埋め尽くし、状況に応じての武装交換ができなくなり、IS戦闘における行動選択が限られてしまう。

普通なら考えられない。操縦者が素人なら尚更である。

しかし、敵のISはあの篠ノ之 束が造ったものだ。何もないわけがない。

（なら　　）

互いの距離が詰まる中、ホークはPICの反動制御をオートからマニュアルに切り替えた。

（いけるっ！）

この距離とタイミングなら、簡単に避けられないはずだ。

背面と両肩後部の加速装置があったからこそできた奇襲。ほとんど博打に近い作戦だが、賭けに勝った。後は攻撃を当てることに専念するだけだ。

外せば二度目はない攻撃。どの道、エネルギーの残量から考えてこれが最後の攻撃になるわけだが。

当たれば生存の可能性が、外せば全てが終わる。

「この一撃に全てを懸ける！」

《宵之明星》の柄を握る腕に力を込め、刀身を下に向けながらブレードを右横に構える。

全力で刀を振り抜こうとする構えだ。後先のことを考えない、今に『ただ攻撃を当てる』という一意専心の姿勢。

距離が近づくにつれて集中力が極限にまで高まっていく。

だからなのか。俺が剣を振り始めた直後、ブレード・ガンナーを駆るホークが取るうとしている行動に気づいた。

（両足を前に　　）

脚部と足部の各噴出口から点火の色を確認してハッとする。

あれは回避動作だ。

ホークはこちらの攻撃のタイミングをずらそうとしているのが分かってしまった。

（避けられる！？）

マズイと思うも、体は既に剣を全力で振り抜こうと既に動き始めていた。

意識と体の動きが離れてしまっている。

これではどうしようもない。

（くそっ！ これでも届かないのか……！？）

ハイパーセンサーの異常か、世界がスローモーションに包まれた。意識だけが明瞭としている中、視界に移る映像は緩やかに、しかし確実に進行していく。

攻撃を止めると強く念じるが、体の動きは変わらず、剣を振ろうとしている。

このまま進めば、敵は攻撃を避け、反撃を受けることになるだろう。そして、その先で待つのは。

（届け……）

強く願う。

届け。

諦めないために。

届け。

生きるために。

届け。

勝つために。

届け。

明日に繋ぐために。

届け。

一夏と千冬さんにまた会うために。

届け。

俺は願った。

「届けええええーっ！！」

操縦者『新永 四季』より思考イメージの送信を確認。

思考イメージ受信。形状選択『大剣』。形状変化に伴う腕部の負担を想定。強化型駆動システム『パワード・エイド』出力70%駆動で補助。

エネルギー・バイパス接続。《宵之明星》形状変化開始。

ホークが行ったのは、脚部と足部のスラスターの瞬間的な後方への最大噴射による瞬間空中後退動作。クイック・エアバック

推進翼の点火をカット、慣性の法則によって生じる等速直線運動を上回る後方移動という機体と操縦者への負担が大きい回避動作だ。加速による勢いを完全に殺し、僅かに後退させる荒業ゆえにエネルギーの消耗は激しい。

しかし、この場面で求められたのは『脚部・足部のスラスターへの瞬間的なエネルギー伝達』だった。

PICの反動制御がオートだった場合、エネルギーの伝達速度が制限される可能性があった。そのためホークは回避動作の阻害因子となりかねいと判断し、マニュアルへと切り替えたのだ。

リスクの大きい回避手段だが、最善の選択だとホークは思う。
これで敵の攻撃のタイミングをずらした　はずだった。

「!？」

ホークは我が目を疑った。

煌星が右横に構えていた1・8mの日本刀型の近接ブレード。
その刀身の形状が　7m超えの大剣に変化していたのだ。
それは剣と呼ぶには大きすぎる鋼鉄の塊だった。

(なん、だとつ　!?)

変化した《宵之明星》にホークの意識が向けられている一瞬の隙に
外見上の重さとは裏腹の高速で薙ぎ払われた超大剣が機体ごと
彼女を一閃した。

鋼鉄の大剣撃によって、ほとんどの装甲と推進翼が碎かれ、シールドエネルギーを大幅に削られたホークは翼を折られた鷹のように地へと墜ちていった。

俺は驚きを隠せなかった。

避けられると思った攻撃が当たり、しかも一撃で落とせたのだから。夢だと思った。しかし、俺の瞳はホークの落下という現実を確かに映していた。

どうやら、これが煌星と《宵之明星》の能力らしい。

攻撃の直前にディスプレイに表示された情報から判明した二つの事実。

一つは《宵之明星》。

通常は日本刀型のブレードだが、操縦者の思考イメージを伝えることで、刀身の形状を変化させる。今回は『届け』という俺の強い想念が巨大な剣へと姿を変えたようだ。

もう一つは煌星の両腕部に付けられた補助システム『パワード・エイド』。

篠ノ之博士が開発したと思われる強化型駆動システムで、通常のISを超えるパワーを付与させ、さらに出力を高めることで強化することも可能。

両腕部と背部の内部フレームに強化が施されていたのは、《宵之明星》の形状変化時及び大剣形態時における動作に掛かる腕の負担を耐えられるようにするためだと思われる。

下から重量感の乗った音が響く。どうやら、ホークが地面と衝突したようだ。

視線を真下に向けると、ハイパーセンサーが公園内にできたクレータの中央に折れた推進翼と砕けた装甲のISを装着した彼女の姿を捉えた。

幸いなことに公園上空からほとんど移動していなかったため、落下

地点は公園内だ。

さて、どうする。

相手のISは防御力と機動力を失い、地に倒れている。また、すぐに動きだす気配もない。

こちらもしールド・エネルギーが少ないという危うい状況だが、ホークが気絶している今なら倒せる。

（シールド・エネルギーを0にして、ISを強制解除させる……！）

《宵之明星》の刀身を7m大から3mへと形状調節し、剣を構える。それに伴って『パワード・エイド』の出力も40％に調整。これで安定した動作が行える。

落下速度を調整しながら、ホークの近くへと下降していく。

距離50……40……30……。

ディスプレイに目標との距離が表示される。

（もうそろそろ学園の人達がこっちに到着してくるはず。IS解除後はそちらに任せるか。後は千冬さんと呼んで）

警告。右後方15mより接近する物体を感知。

皮算用に考えていると ハイパーセンサーが右後方から迫る“槍”を唐突に捉えた。

「!？」

反応するが間に合わず、右後方から迫ってきた“槍”を避けられなかった俺は大きく弾かれた。

その際、シールド・エネルギーと装甲が削られるが、それほどのダ

メージではなかった。

「ぐっ……！」

弾かれながらも、襲ってきた者の正体を見ようと有線式の槍　ワイヤー・スピアというのだろうか　が繋がってる先に目を向けた。そこには黒い翼を広げた禍々しい悪魔の姿があった。

（いや、あれは…… ISだ！）

機体の姿勢を整えながら、相手をよく見る。

俺を襲った者の正体は金と黒の装甲を纏い、鉤爪のような黒翼を持つ ISだ。

操縦者も日本人形のような真っ直ぐと伸びた黒髪ストレートと生気を感じられない漆黒の瞳を宿していた。

美少女と評されてもおかしくない端正な顔立ちも、それらの特徴と近寄りがたい雰囲気によって台無しになっていた。

黒と金の ISの操縦者がホークの傍へと静かに降り立つ。

いつの間にか目を覚ましていたホークがそちらに首を傾けた。

「ぐっ…… BGか……」

「篠ノ之博士の追跡を断念。任務続行不可と判断。撤退のために ISの解除を要求」

「撤退だと……、ふざけるなっ！　私はまだやれる……！」

機体の状態に構わずホークが体を起こし始めた。

パキパキッ……と、装甲の破片が地面に剥がれ落ちていく。

「ブレード・ガンナーのダメージレベルを測定　Cと断定。戦闘の続行は不可と判断する。また、3km圏内に敵軍IS六機の機影を確認。二十秒後の接触を予測。時間的余裕は限りなく少ない。最悪の場合　ブレード・ガンナーのコアを回収後、秘密保持のために機体のデータおよびホークの抹消、離脱しなければならない」

『命令を聞かなければ殺す』とまで脅されれば、流石のホークも黙った。

「……っ、分かった……」

ホークは一度舌打ちすると、ISを解除させた。

そして、BGと呼ばれた少女が乗る黒と金のISの腕でホークを抱き、こちらを一瞥した後、黒翼の推進機を点火し始めた。

離脱直前、ホークが恨みがましい眼で俺を睨みつけながら言い放った。

「この借りは……必ず返す……！　覚えていろ、織斑　一夏……！」

ホークの声を最後に、黒と金のISの姿が消え、ディスプレイに『敵IS消失^{ロスト}』の文字が表示された。

恐らく、光学迷彩とレーダーやハイパーセンサーの能力を攪乱あるいは捕捉を不可にする特殊な装備を持っているのだらう。でなければ、目の前で起きた現象とディスプレイの表示の説明ができない。

そこでようやく、襲撃者の装備を冷静に分析している自分に気づく。

（どうやら助かったみたいだ……。それにしても、最後まで俺を一夏と勘違いしたままだったな。おまけにお決まりの捨て台詞まで残して。できれば、二度と会いたくはないんだが　）

危機を脱したことに安堵するが、それも束の間。次の危機が訪れ始めた。

二十秒後、煌星のハイパーセンサーがこちらに向かってくるIS三機を捕捉した。

BGが言っていた六機のうち三機しか捕捉しなかったということは、ここで姿を消した二体のISを追跡する班と俺を捕らえる班に二手に分かれたのだろう。

ディスプレイにこちらに近づいてくるIS『デュノア社製第二世代型IS・ラファール・リヴァイブ』のデータが表示される。

表示されたISの三機は距離と保ち、俺の周囲を囲んでアサルトライフルを構えてきた。その内のリーダーと思われる女性が強めの口調で告げてきた。

「大人しく武装とISを解除して投降しろ！ この警告に従わなかった場合、直ちに攻撃を行う！」

ジャキツとアサルトライフルの最終安全装置が外され、それぞれの指がトリガーを引っ掛けるのを確認した。

「繰り返す！ 武装とISを解除して投降しろ！」

先程と変わらない強めの口調で一字違わず再度告げられる。

争う気など微塵にも持ち合わせていない俺は警告に従って、『宵之明星』を下げ、煌星の起動を解除、待機形態へと姿を変えた。

IS解除後、私服姿の俺の右手に握られていたのは煌星の待機形態であるベルト状のシルバーチェーンだった。

「これでいいか？」

無抵抗だと主張するように両手を挙げながら、周囲に声を掛ける。
すると、俺を囲んでいたIS操縦者達の間には動揺が走りだした。

「お、男……!？」

「男がISを動かしていたのか……!？」

まあ、所属不明のISを動かしてたのが男なら、誰でも驚くよな。

大体予想通りの展開になってきたと思いながら、どっという風に話すか考える。

(とりあえず、千冬さんに会わせてもらっように話してみるか)

空を見上げると、紅く染まった東の空と星が疎らに輝く闇色の西の空に分かれていた。

まるで自分が始まりと終わりの境界線上に立っているように思えた。

.....

.....

.....

.....

「クシュッ」

いきなり何の前触れも無く、くしゃみが出た。

「一夏、風邪か？」

ベッドの上で雑誌『剣に生きる道・四十五巻』を読んでいた同居人にして俺の幼馴染である篠ノ之 箒が俺を気遣う言葉を送る。とりあえず、心配ないと、返す。

「もしかしたら、誰かが俺の噂をしてるとか、なーんて」

冗談のつもりで言ったのだが、何故か箒は不機嫌な顔をした。

「噂してるだろうな。なにせお前は『世界で唯一ISを動かせる男』なんだからな。世界中から注目を浴びてさぞご満悦だろう」

ふんつ、と俺から顔を背けると、再び雑誌を読み始めた。
うーん……何でこの幼馴染はいつも機嫌が悪いんだろうね。カルシウムが足りないとか。

「……………（ギロツ）」

……どうして、俺の思ったことがばれるのだろうか？ 顔に出してないはずんだけどな。

ふと、時計に目をやると時計の針が七時半を過ぎていた。
そろそろシャワーを浴びてきたらどうだと箒に言おうとした時、ドアをノックする音が聞こえてきた。

「はい」

ドアを開けるとそこには一年一組の副担任こと山田 真耶先生が立っていた。

「あれ、山田先生、どうしたんですか？ こんな時間に」

「お引越しです」

「はい？」

山田先生の突然の引越し宣言に俺は困惑した。えーと、誰が？どこに？

「……先生、主語が抜けてます」

不良が小学生相手にガンを飛ばすように幕が鋭い視線を山田先生に向ける。

本人はそんなつもりはないんだろうけど、（本人曰く生まれつき）少し不機嫌そうに見える目つきのせいで、どうしても睨んでるように見えてしまう。

おかげで山田先生は小動物のようにビクッと体を震えさせた。まさに蛇に睨まれた蛙である。

「す、すみませんっ。えと、ですね。部屋の調整が付いたので篠ノ之さんは別の部屋に移動するように、ということをお伝えに来たんです」

「えらく急ですね」

「それはまあ、流石にいつまでも男女が同じ部屋というのは問題がありますから、早い内に済ませた方がいいと思ひまして」

ふむ、確かにそうだ。

歳の近い数百人の女子と一つ屋根の下で暮らしてることでさえ問題があるのに、幼馴染とだからといって男女が同室で同居するのは道徳的に良くない。ついでに言えば、俺の精神的にも良くない。

簾が着替える時なんかは特に。着替えの度に聞こえる衣擦れの音が気になって落ち着かないし、長くも感じるからなあ……。これだけは未だに慣れない。

「ま、待つて下さい。それは今すぐでないといけませんか？」

？ 簾の奴、何で慌ててるんだ？

まるでこの部屋から出ていきたくないようにも見える。

もしかして、この部屋の窓から見える景色が気に入ったから 　　な
わけないよな。

「それは、まあそうです。織斑先生からも言われてますし、それにいつまでも篠ノ之さんがくつろげないでしょう？」

「い、いや、私は 　　」

まごついた簾がチラツと俺に視線を向ける。どうして、俺を見て

あ、そうか。そういうことか。
意外と心配性なんだな。

「心配するなって。簾がいなくてもちゃんと起きれるし、歯だってちゃんと磨くぞ」

「 　　！」

あれ？ どうしてそんなに睨みつけてくるんだ？

間違ったことでも言ったか、俺？

「先生、今すぐ部屋を移動します！」

「は、はいっ」

すぐに荷造りに取り掛かり始める箒。
クローゼットの中から取り出した自分の服や下着をバッグの中に無造作に詰め込んでいく。

おいおい、そんな風に入れたら服にしわができるぞ。

「俺も手伝おうか？」

「いらん！」

うお、ものすごく怒ってるな。 触らぬ幼馴染（怒）になんとやらだ。
ここは黙っておくしかない。

・
・
・
・

一時間も経たない内に箒の引越しは完了した。

うーむ、同居人がいなくなっただけでこれだけ広く感じるとは。 二人部屋だから当たり前だけど。

箒は部屋から出る時も怒り顔だった。 よく分からないが、明日謝っておくか。

「風呂でも入るか。 あ、その前に」

枕元に置いてあった携帯を取り、リダイヤルから電話先の番号を探しだして掛ける。

電話の相手は実家に住んでいる四季だ。

食堂で流れていたニュースを見て始めて知ったのだが、実家の近辺にある公園で謎の爆発事故が起きたらしいのだ。現在調査中ということの詳細は不明。

幸い、付近の住民や住宅に被害はなかったとは言っていたので気にしなかったが……少し心配である。

数秒間鳴らしていると、四季が電話に出た。

『はい、もしもし』

「あ、四季か。電話に出てきてくれて安心した」

『いきなり何だ』

「いや、ニュースで実家の近くにある公園で爆発事故が起きたって知ったから心配になってさ」

『……爆発事故？』

まるで今さっき初めて知ったような四季の反応。
寝てて気づかなかったとか？

「知らなかったのか？ ニュースじゃ、結構爆発音が響いてたらしいが……」

『ああ、そういえば花火みたいな爆発が外で響いてたような気がしたな。料理中だったから気がつかなかった』

あー、料理中じゃ気づかないか。火使うし、集中してないと危ないもんな。

「なににせよ無事で良かった」

『……全くだ』

……やっぱり、なんか変だな。

「四季、何かあったのか？」

『どうしてだ？』

「いや、さっきから、なんていうか……声に元気がないっていうか」

『気のせいだ。 いや、一人で暮らしてるから、自分でも気づかない内に元気がなくなってるのかもな』

「ははっ、何だよそれ。 お前らしくないぞ」

『……そうだな。 そうかもしれないな』

携帯の向こうからフツと四季が小さく笑う声が聞こえた。
少しは元気になったか。

「あ、千冬姉にはちゃんと連絡したか？ しなかったら、後で何言われるか分からないぞ」

『言われなくても連絡済みだ』

「そうか。 ならOKだ。 それじゃそろそろシャワー浴びるから切るぞ」

『ああ。近い内にまたな』

「おう」

プツツと向こうの電話が切れるのを確認した後、携帯を閉じる。

「ん？ 近い内に、ってどういうことだ？ まだ三週間ぐらいは家に帰るつもりはないんだが……」

きつと、四季が勘違いしたんだろう。うん、そうだ。そうに違いない。
深く考えても仕方ないので、シャワーを浴びて早めに寝ることにした。

そして、三日後の朝のSHR。

俺 織斑 一夏は四季が言った『近い内』の本当の意味を知ることになる。

それは同時に、俺と四季の物語が始まる瞬間でもあった。

Prologue・Last『End of the beginning』

やっとプロローグが書き終わりました。

長くかかりすぎた……orz

これでようやく学園編が書けます。

原作一巻のラストで第は引越しますが、後の展開のためにクラス対抗戦が終わる前に引越しさせました。

読者の皆様、不定期更新ながらも読んでくださってありがとうございます。

こんな作者ですが、よろしく願っています。

引き続き、IS インフィニット・ストラトス 〈Fatal S
triker〉をお楽しみください。

オリジナル設定？（前書き）

オリジナル主人公とオリジナルISの紹介

オリジナル設定？

あらなが しき
新永 四季

性別：男

年齢：記憶喪失により正確な年齢が不明（外見年齢15歳）

誕生日：記憶喪失により不明（一夏と同じ9月27日にしてある）

女性にしか扱えないISを動かせる少年。一夏の親友。

名前以外の十歳以前の記憶を全て失っており、また両親はいない（正確には記憶がないので不明）。ある出来事をキッカケに一夏の姉である千冬が四季を保護、後に千冬が後見人となる。一夏・千冬とは家族に近い関係。

性格は冷静なようで実は静かに燃える熱血漢。無愛想な外見とは裏腹の優しさを見せる。日常生活における感情表現が苦手で常にポーカーフェイスでいることが多く、ある程度のことで動じない。

誰よりも人との絆を大切にしている。周囲の空気には敏感で状況に応じて空気を読んだ行動を取るが、自分に関することは一夏と並んで超が三つ付くほどの鈍感。

記憶を失う以前の自分がどういう人間であったのか時々不安に思うことがある。

『忘れる』ことへの恐怖は人一倍に大きく、どんな些細なことでも記憶する能力『直観象記憶』と対象となる人間や物事の本質を捉える洞察力がある。

これらの能力はIS戦闘においても大いに役立つことになる。また、超能力や非科学的な力の類ではなく、四季が記憶するためにあらゆる人間の観察や物事の記憶をしてきたことで自然と獲得したものである。

一夏と同じく家事ができ、中でも玉子料理が得意で、その味は病み

つきになるほどの美味さと言われている。

専用機：煌星^{きらぼし}

部類：近接格闘型

待機状態：ベルト状のシルバーチェーン

一夏と同様、四季のために用意された第三世代型IS。機体メインカラーは銀灰色。

パワーと装甲重視で設計されているため、通常のISよりスピードが若干劣っているが、背面と両肩の加速装置による突進力が備わっている。なお、肩装甲の可変翼に付けられた姿勢制御装置がバランサーの役割を果たし、加速による機体制御の安定を図っている。

両腕部に組み込まれた強化型駆動システム《パワード・エイド》によつて、通常のISを遥かに超えるパワーを発揮でき、最大出力時では両腕部が展開され、IS装甲を容易に粉碎、状況によつては行動不能させることも可能。また、《パワード・エイド》によるパワーに機体が耐えられるよう、両腕部と背部のフレームに強化が施されている。これにより、超大剣に変化させた《宵之明星》も扱え、反動にも耐えられる。

白式の時と同様、篠ノ之 束が直接開発した機体。製作者の趣味が影響か白式と同じ接戦闘特化型の仕様となっている。

第一形態時から単一仕様能力が使える仕様となっているが、能力内容は不明。

機体のコアの出所は不明。

武装

・近接特化ブレード《宵之明星》^{よいのみよつじょう}。

束が開発した近接格闘武装。刀身の材質が形状記憶液体金属であり、通常時は日本刀型だがエネルギーを消費することで柄に内蔵された液体金属が刀身を覆い、曲刀や超大剣の剣に展開する。

操縦者の思考イメージをフィードバックし、様々な刀身の形状パターンおよび大きさに変化・形状固定が可能。エネルギー消費によって変化する刀身最長は7m。刀身の変化による質量変化ないが、刀身が大きくなる程、小回りが利きづらく扱いが困難になる。

なお、『宵之明星』には篠ノ之 東が発案した『展開装甲』と同じ第四世代技術『練成武装』が採用されており、これによって扱いの難しい形状記憶液体金属の兵器運用が可能になっている。

オリジナル設定？（後書き）

話が進むにつれて、設定を追加していきます。

第二形態は別に掲載するつもりなのでご了承くださいませ。

Part 1『少年達の再会』

「本日より藍越学園からこのIS学園に転校してきました新永 四季です。ISに触れ始めて日は浅いですが、頑張っていこうと思います。よろしくお願いします」

壇上に立ち、ほとんど緊張を感じさせない態度と無表情で挨拶するのは俺の親友であり家族でもある四季。

右から見ても、左から見ても間違いなく四季だ。しかも、IS学園指定の制服（男子生徒用）を着ている。

はて、おかしいな。藍越学園に通ってるはずの四季が何故ここにいるんだ？

「お、おとこ……？」

クラスの誰かが目の前の事実には驚きすぎて、その一言だけしか口から絞り出すことができなかったように呟いた。

まあ、俺以外の男がここににいるからなあ。みんなの反応は至極当然というか。

「……………」

しーん……と、教室が水を打ったように静まり返る。

沈黙が漂っているにもかかわらず、四季は平然とした様子。

俺だったら、間違いなく「あ、あれ？」って、内心焦ってただろうな。

「き……」

き？

「「「きゃああああ　　っ！！！！！」」」

耳を劈くほどの大音量の歓声が沸いた。

爆音ともいえる歓喜の叫びは恐らく、隣の教室……いや、一階の全教室に届いただろう。

「男子！　二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「織斑くんが続いてイケメン！」

「キリッとした目！　かつこいいー！」

「IS学園に来て良かったー！」

歓喜する女子に対し、四季は依然とポーカーフェイスのまま。

相変わらず動じないのな。どうしたら、そこまで動じないのかコツがあるなら知りたい。

「うるさい、静かにしろ」

某三国史の武将　　もとい千冬姉の一喝で歓喜の嵐が一瞬で静まった。

まるで恐怖政治を強いる暴君とそれに虐げられる民のようだ。

パンツ！

「くだらんことを考えるな、馬鹿者が」

痛い。すげえ痛い。

何故バレた。　　ハッ、まさかIS学園では読心術が必須科目なのか！？

……ないか。うん、ないな。

そんなことを考えていると、俺の左の席の女子　えーと、確か岸本さん？　が恐る恐ると手を挙げた。

「あの、先生……聞いてもいいですか？」

「何だ？」

「織斑くんことはニュースや新聞で話題になったのに、何故新永くんは一切知られてないんでしょうか？　二人目でも充分に異例のほすですけど」

そついやそつだ。

俺と違つてなんで四季は知られなかつたんだろう？

「新永がISを動かせると分かつたのはつい最近のことだ。試験会場を間違えたどこぞのアホと違い、新永は私が学園に用事で呼んだ際に判明した」

そのアホつて俺しかいないよな？　教職員が生徒にアホつて言うなよ。確かに間違えたけどさ。

「『滅多にない機会だからISを見せて欲しい』と頼んできてな。本来なら部外者に決して学園内を見学させないのだが、私の権限で特別に許可した。その見学中に新永がISに触れ、動かしたというわけだ」

……今の千冬姉の説明、なんか変だな。ものすごく引つかかりを感じる。

千冬姉つて、四季に対してこんなに甘かつたっけ？

でも、みんな納得しているみたいだし、俺の気のせいかな。

「えっ、先生と新永くんは知り合いなんですか？」

岸本さんがささず疑問を尋ねてくる。

まあ、知らない人からすれば気になるよな。

「その辺りのことは休み時間に新永と織斑から聞け。新永、お前の席は窓側の列の一番後ろの席だ。山田先生、新永が席に着き次第授業を始めてくれ」

「は、はいっ」

クラスの女子一同からの好奇の眼差しを向けながらも全く動じる様子のない四季が指定された席に座った後、山田先生が授業を始めた。俺も四季に聞きたいことがあるからな。早く休み時間になって欲しいもんだ。

気になって気になって、授業の内容が頭に入らない。

(……そっぴや、四季って授業分かるのか?)

俺と同じようにISに関する予備知識が無いまま転入させられたから、一般教養はともかく、ISについて全く分からなくて困ってるはずだ。

俺も初めの頃は全く分からなくてすごく困ったからなあ。お陰で千冬姉に電話帳並みに分厚いISの参考書の内容を一週間で覚えてこいとか言われたり、山田先生とマンツーマンの補習を受けたり、あれは本当に大変だった……。

今日から同じ学び舎で過ごす仲間になるんだ。ここは助け合っていないとな。

「と、今のところで分からないところがありますか？」

やべっ！ 四季のこと考えてて全く聞いてなかった！

「先程説明した内容はP I Cに関する内容です。ですので、復習の意味もかねて、どなたかにP I Cについて説明してもらいましょうか。えーと……」

俺に当たりませんように、俺に当たりませんように、俺に当たりませんように……。

「織斑、説明してみる」

当てられまいと必死で祈っていたのに何故か千冬姉に当てられてしまった。

「お、俺ですか！？」

「なにやら当てて欲しそうなオーラが立ち上っていたからな。それにこの間の山田先生との補習で覚えたはずだ。P I Cの説明くらい簡単だろう？」

ニヤリと口元の端を吊り上げて笑う千冬姉。
バ、バレバレでいらっしやいましたか……。

「え、えーと、P I Cは、通称パ、パッシブ、イナーシャル？ キヤンセラーと呼ばれており、あー、つまり…… I Sが空を飛ぶためのものです。以上」

ガンツ！

「小学生の説明か」

千冬姉のありがた〜い拳骨を喰らう。かなり痛い。今ので俺の脳細胞は1万個は死んだに違いない。

俺、入学してから何回殴られただろうな。

「山田先生がわざわざお前のために時間を作って補習の機会を設けてくれたというのに、全く覚えていないとは……猿以下だな」

猿って、ひでえ……。

「新永、代わりに説明してみせろ」

ちよ、千冬姉。いくらなんでも、さっき転入してきたばかりの四季にそれは無理なんじゃ

「分かりました」

いきなり千冬姉に振られたにもかかわらず、四季は特に慌てた様子もなく、席から立ち上がって説明をし始めた。

「PICは『Passive Inertial Canceler』の略称でISの浮遊・飛翔・行動を行う重要なシステムです。『Passive』と冠せられているのは、慣性制御が自動的に行われることから来ています。ISは基本的にPICで機体を浮かせ、肩部の推進翼や脚部のスラスタを用いることで姿勢制御・加速・停止などの三次元的な動勢を行うことができます」

前を向いたままスラスタとPICについて説明をする四季。

手元に教科書がないのに、読むように淀みのない口調だ。
あれ、四季って、今日転入してきたばかりだよな……？

「では、『指向性PIC』とは何か説明してみせろ」

「『指向性PIC』は機体前方にのみPICを発生させないことで『前方向に向かって落ちていく』という理論を第二世代ISで実現させたものですが、それだけでは加速できないため、ごく一部の機体には採用されなかった技術と記憶しています」

「よし、座っていいぞ」

「はい」

千冬姉と四季以外、ポカーンと口を開けて啞然としていた。
俺を含め、クラスの女子と山田先生も四季が千冬姉の問い掛けに普通に答えられるとは思っていなかったからだ。

「織斑、参考書を電話帳と間違って捨てたお前と違って、新永はちゃんと参考書の内容を覚えてきてるぞ？」

ぐう……本当のことだから返す言葉もない。

そうだよな。IS学園に転入させるとなったら千冬姉が四季が参考書を読ませないわけがないよな。俺の時もそうだったし。……読む前に捨てたけど。

「これからは予習・復習はするように。ちゃんと覚えてきてるかどうかが授業を行う度に確認するからね」

つまり、授業の度に質問して答えられなかったら折檻があるってこ

とですね。分かります。

……今日から真面目に勉強しよう、千冬姉に殴られないために。
俺はそう心から誓うのであった。

P a r t 1 『少年達の再会』 (後書き)

P I Cの説明はI S インフィニット・ストラトス 第2巻B D 特
典の資料から参考。

Part 2『もう一人の家族』

キンコンカンコンコン

授業が終わるチャイムの音が学園に鳴り響く。

待ちに待った休み時間だ。

千冬姉と山田先生が教室から出ていくのを確認すると、俺は四季と話をするために窓側の最後列の席へと歩み寄った。

その様子を周囲の女子達が興味津々といった表情で見ていた。

そんなに俺達の関係が気になるのだろうか？

「久しぶりだな、一夏」

「お、おお、久しぶり」

いかん、ちょっと上擦ってしまった。

「どうした、久々の会話で緊張でもしたか？」

「な、何言っただ、いつも電話してたんだから、そんなわけないだろ」

「そうだな」

フツと軽く笑う四季を見て、俺は少し気が楽になった。

やっぱり男同士ってのはいいもんだな。おまけに知らない仲でもないし。

そんな風に四季と会話をしていると、女子の一人が緊張な面持ちで訪ねてきた。

「あ、あの、ちょっといいかな？ 訊きたいことがあるんだけど…」

俺はその女子が四季に何を聞こうとしているのか容易に予想がついた。

四季も俺と同じことを考えているだろう。

「えと、新永くんって、織斑くんや織斑先生とどういう関係なの？ 普通の知り合いって感じじゃなさそうだし、仲親しげだし」

「それは……」

四季は何故かすぐに答えようとはしなかった。どう答えようかと考えているみたいだ。

何をそんなに考える必要があるのだろうか？
少しまどろっこしかったので俺が答えることにした。

「四季は俺達の家族なんだ」

俺の返答に周囲の女子達がざわつき始めた。

四季を一目見ようと廊下側に集まっていた他のクラスの女子達にも伝わったようだ。

恐るべし、女子の情報伝達速度。

「でも、苗字が違ってるよね？」

あー、やっぱりそこ突っ込まれたか。

どう答えようかと考えている俺を横目で見ていた四季が溜息を一つ吐くと、仕方なさそうに説明を引き継いだ。

「一夏、それだけじゃみんなが誤解するだろ。俺はある事情で五年前から織斑家に居候させてもらってるんだ。だから、二人とは血縁関係のない、いわゆる他人だ」

四季の奴、まだこんなこと言ってるのか。

小学校の頃、色々言われたからって引きずりすぎだ。

「そういう言い方はよせよ。五年も暮らしてりゃ、血が繋がってなくても家族同然だ。俺だけじゃなく、千冬姉もそう思ってる。……お前はそうは思ってくれてないのか？」

「……そんなことはない。俺も二人のこと、大切な家族だと思ってる」

「だったら、もう他人だなんて寂しいこと言うなよ」

「……悪い」

四季はあまり物事に動じないけど、『家族』について触れられるといつもこうなるんだよな。

俺と千冬姉を大切な家族と思う反面、血や苗字で本当の家族ではないと思ってしまうている。

本人からすれば、俺達の関係は『他人以上家族未満』って言ったところか。

そういう意味では俺達は本当の意味で『家族』になれていないかもしれない。

けどな、四季。血や苗字なんかよりも、もっと大事なものがあるはずだろ？

それに気づいてくれたら、俺達は

「そ、そういうことだったんだ。　　ごめんね、新永くん。変なこ
と聞いちゃって」

こちらの雰囲気少し暗くなったと感じ取ったのか、質問をしてき
た女子は四季に頭を下げて謝った。

その謝罪に対し、四季は気にすることなんか無いといった感じの態
度で、

「いや、誰もが気になってたことだろうから、芹沢さんが質問して
くれて助かった。こういうことは早めに言っておかないと変な噂が
立って、後々面倒なことになりかねないからな」

その面倒なことというのが、俺や千冬姉に迷惑を掛けることに繋ぐ
可能性があると考えているのだらう。そこまで気にしなくてもい
いのに。

「え、何で私の名前……」

「職員室で山田先生と話をしていた時にこのクラスの席表を見て全
員の名前と位置を覚えた。紹介された時に実際に顔を見て確認した
から、芹沢恵里香さんで間違ってないはず」

「う、うつん、合ってる！　間違ってないよ！」

ブンブンと首を縦に振って肯定する芹沢さん。

そんなに名前を覚えてもらったのが嬉しかったのだらうか？

「じ、じゃあ、私の名前も知ってる？」

「わ、私の名前も分かる？」

「相川清香さんに、夜月さやかさん」

名前を呼ばれた二人の女子は感激したように目を輝かせ、キヤーキヤーと喜び合った。

おお、すごい喜ばれようだ。

「本当に覚えてるんだ……。すごい記憶力……」

「きーっ、名前覚えてもらっちゃった！」

「なるほど、だから教科書無しでも織斑先生の質問に答えられたんだ。納得」

四季の記憶力に女子達から感嘆の言葉が並べられる。自分のことじゃないけど、身内が褒められるのは悪い気はしない。

「ねえねえ、新永くんって、ひょっとしてもものすごく頭が良かったりする？」

「いや、単に覚えるのが得意というだけで、頭が良いわけじゃない。そんなに自慢することでもないし」

「謙遜も過ぎれば却って嫌味になりますわよ。その人並み外れた記憶力はある意味才能の一種ですよ」

と、言葉と共に一人の女子が四季に近づいてきた。

縦ロールのある金髪に透き通った碧眼、そして貴族のお嬢様のような言葉遣いと態度。

このクラスでこれらが当てはまる女子を俺は一人しか知らない。セシリアだ。

「君は……セシリア・オルコットさんか」

席表で位置を覚え、自己紹介の時に確認したので間違いない。イギリス代表候補生のセシリア・オルコットだ。
なるほど、確かに一夏が言っていたような女性だ。
しかし……

「……何か？」

ジツと見られていたことに不快感を覚えたのだろう。彼女の眉根が少し上がっていた。

初対面で相手を見つめるのは失礼なのだから、当然の反応だ。

「いや、すまない。以前一夏から君の話を聞いてたから、つい見つめてしまった」

「い、一夏さんから？」

「ああ」

「そうですか。一夏さんが私の話を……」

オルコットさんはどこか嬉しそうな表情でそう呟いた。
その様子は宛ながらさながら気になる異性が自分の話をしているのを聞いて喜ぶ乙女のようなのだ。

もしか、彼女は……

「あ、あの、それで一夏さんからどのように伺ってありましたの？」

言っているものだろうか。

そう思いながら横目を向けると、一夏は首を左右に振っていた。
なるほど、分かった。

「一言でいえば、男性を嫌う傲慢な女性だと」

「ちよつ、おまつ!？」

何で言うんだよ、と言いたげな表情の一夏。
まあ、別に黙っておく理由がないし。

「なつ……い、一夏さん、そんなことを思ってたの!？」

オルコットさんはキツと一夏を睨みつける。

一流の狙撃手のような鋭い眼光に射抜かれた一夏はたじたとじとしていた。

仕方ないので、助け舟を出すことにした。

「なにしろ俺が聞いたのは一夏が初めて君と会話した時の話だからな」

「う……」

一夏との初対面の時のことを思い出したのか、熱が冷めるようにオルコットさんの怒りは静まり、先程とうってかわり落ち込み始めた。彼女の様子から俺の予感確信へと至った。

彼女 セシリア・オルコットは一夏に好意を抱いている。

一夏から聞いたクラス代表を決める決闘の間もしくは後に、彼女の心に何かしらの変化があったのだと思われる。

例えば、一夏の戦う姿に惚れたとか、男らしさに惹かれたとか

この辺りの理由は憶測でしかないため分らない。

そうなる、気になる異性に悪く思われてしまったのではないかと彼女は不安に思っているはず。

そこまで気に病まなくても、一夏は全く気にしないから大丈夫というか、微塵も気づきかないから思い悩む必要はない。

しかし、そう説明したところで気に病んでしまうのが恋する少女の難点な所だ。

今フォローしておかないといつまでも引きずっていきそう。

「けれど、実際に話してみてもイメージと違ってたから少し戸惑った。本当に電話で言ってたような人だったのか？」

「いやまあ、最初はそうだったんだけど、いつの間にか優しくなってきたというか……」

予想通り一夏は彼女の変化に気づいていない。
相変わらず鈍い奴だ。

「なら、オルコットさんにも思うところがあって男性に対する考えを改めたってことじゃないのか？」

「そうなのか？」

一夏が尋ねると、オルコットさんは何かに気づいたかのようにハッとなったかと思えば、落ち込みから一転、テンションを上げ、ポーズを決めながら答えた。

「どうやら、俺の意図に気づいてくれたようだ。」

「そ、そうですね！ 昔から私は男性に対してあまり良いイメージを持っていませんでしたの。だから、『男』という安易な理由で一

夏さんにその、少々きつい態度を取ってしまったのですわ」

「少々だったか……？」と、一夏が首をひねりながら呟く。
しかし思った以上に回復早いなこの子。意外と単純なのかもしれない。

「あの決闘経て、私は男性のことをもっと知るべきだと思い、一夏さんと友好関係を深めていきたいと思いましたの」

「なるほど、セシリアはそこまで考えていたのか……すごいな」

彼女が深めていきたいのは友情より愛情の方なんだろうが、一夏がそれに気づくことはないだろう。

「じゃあ、せっかくだし四季とも友達になったらどうだ？」

一夏の提案に「え？」とオルコットさんの口から漏れる。

「男を知りたいなら、多い方がいいだろうし、友達も増える。まさに一石二鳥だ。おお、我ながら良い提案だ」

えへん、と一夏は胸を張って得意げな顔を作る。

たまに絶妙なタイミングで良いこと言ってくれるな、こいつは。本当たまにだけだ。

「そうだな。俺もクラスみんなと友達になりたいと思ってるし、知っていききたい。オルコットさん、どうだろう？」

俺は手を彼女に向けて差し出す。

数秒間の沈黙。そして、

「……そうですわね。友好関係を望んでる殿方の手を払いのける理由もありますし、よろしくてよ」

上からの物言いだ、これが彼女のスタイルだと理解しているので不快な思いはしない。

差し出されたオルコットさんの手を掴み、俺達は互いに握手を交わし合う。

「改めてよろしく頼む。俺のことは四季と呼んでくれ。名前の方で呼ばれる方が親しい感じがするから」

「でしたら、私のこともセシリアと呼んでくださいな」

こうして、俺とセシリアは友人となった。

「セシリアいいなあ……新永くんとお近づきなれて……」

「だ、大丈夫よ。新永くんも私達と友達になりたいって言ってたし、まだ焦る段階じゃないわ……」

周囲の女子が羨ましそうにこちらを見ているのが少々気になったが、特に深い意味はないだろう。

キーンコーンカーンコーン

授業開始を知らせる学園のチャイムが鳴り響いた。

どうやら、ここで話は一旦終わりみたいだ。

「っと、チャイムが鳴ったか……。話は次の休み時間に持ち越しだな。また後で」

「ああ」

自分の席へと戻っていく一夏と女子達。

次の授業の準備を行うと鞆を開けると数冊の教科書の他に、授業には関係のない本が一冊入っていた。

本のタイトルは『世界の刀剣図鑑』。

「……」

その本を見ながら、俺は三日前の夜 初めてISS学園に連れてこられた時のことを思い出していた。

Part 3 『過去への手掛かり』

IS学園。

ISの操縦者育成を目的とした教育機関であり、ISを除けば普通の学園と変わらない学生達の学び舎　というのが、四季の中にあるイメージであった。

だが、彼が連れてこられた場所はそんなイメージとは程遠い。

サスペンスドラマで刑事が犯人に尋問する取調室のような、机一台と二脚のパイプ椅子だけが置かれたの部屋。その部屋には椅子に座る四季と、机を挟んで向かい側の椅子に座る尋問役の女性と、ドアの入口のすぐ横に立っている被疑者の逃亡を防ぐ監視役の女性の三人がいた。

初めは学園だけに生徒指導室か職員室のような場所に連れて行かれるのだと思っていたのだが……

（まさか、IS学園にこんな部屋があるとは……取調室もあるなら、留置場とかもあるかもしれないな。　拘束される覚悟だけはしておくか）

四季がこの取調室に連れてこられて、三時間は経過している。

その間、向かい側に座る女性は尋問を行い続けたが、四季は開始時に『織斑　千冬に会わせて欲しい。彼女以外と話すことはない』と言った後、口を閉ざし何も答えようとはしなかった。

ちなみに彼のIS『煌星』は学園側に没収されており、今手元にはない。

長時間の黙秘を続け、ポーカーフフェイスを保ち続ける四季に対し、尋問役の女性は額から汗の玉が浮かび、精神的な疲労を表情から隠せないでいた。

監視役の女性が尋問役の女性に交代の提案を持ち掛けようとした時

沈黙が続いていた取調室に変化が起きた。

コンコン、とドアをノックする音が生まれたのだ。

「私だ」

凜とした女性の声。

その声を聞いた三人の脳裏にドアの向こう側にいる人物の姿が浮かび上がった。

理由は簡単だ。その人物のことを知っているからである。

監視役の女性が慌ててドアを開ける。

ガチャッと無機質な音と同時に内側に開かれるドア。そして、スーツがよく似合う長身の女性　織斑　千冬がそこに立っていた。

「お、織斑先生どうしましたか？」

千冬を相手にすると緊張するのか、声のトーンを固くしながら尋ねる尋問役の女性。

そんな彼女の様子にかかわらず、千冬はハッキリとした口調で告げた。

「そいつの尋問だが、続きは私が引き継ごう」

告げられる言葉に尋問役と監視役の女性二人は顔を見合わせる。

何故織斑先生自ら？　と疑問に思ったからだ。

「で、ですが、いくら質問しても、何も話そうとしませんよ」

「話すさ。そいつは私の身内だからな」

「お、織斑先生の……！？」

身内という言葉に驚きを隠せない女性達。だが、千冬が自ら尋問を引き受けようとした理由にも納得した。

「現場の事後処理が思った以上に手間取ってな、伝えるのが遅れた。後は私がやるから、君達は休んでくれ」

「わ、分かりました……」

未だに信じられないと言わんばかりの表情の二人は反論することもなく、退室する。

入れ替わるようにして入室してきた千冬が空いた椅子に座り、四季と向き合つと、呆れるように深い溜息を一つ吐いた。

そんな彼女に申し訳なく思いながらも、四季は再会の言葉を口にした。

「久しぶりですね。千冬さん」

「こんな所で久しぶりに会いたくはなかったのだがな。何故、何も話さなかった？」

「大事なことは一番信頼できる人から先に話す　そうあなたに教わりましたから」

「ああ、そういえばそうだった。私がそうお前に教えたのだったな。……全く、よくできた義弟というのも時によっては困ったものだ」

ふふ、と苦笑混じりの笑いを浮かべる千冬を珍しく思いながらも、いつもの姉で変われないと四季は安心した。

「無駄話はここまでだ。一体何があった？」

千冬は表情を真剣なものにすると本題に入り始めた。

「自分でも信じられない話なのですが……」

四季は千冬に今日起きた出来事 帰宅途中に公園に生えていたウサ耳、空から降りてきた篠ノ之 束、『煌星』の起動、そして襲来してきた敵との交戦 を一部始終話した。

……

……

……

……

「そうか、あいつがお前に……」

話を聞き終えた千冬は考え込むように腕を組んで目を瞑った。
数十秒後、千冬が静かに目を開けた。

「意図的にお前との接触を図ったと見て、まず間違いないな」

「俺にISを渡すために、わざわざ？」

「そうだ。あいつは無駄なこと、無意味なことに時間を費やすことなど絶対にしないからな」

まるで友人を語るような口調に四季は思わず尋ねた。

「千冬さんは篠ノ之博士と知り合いなんですか？」

「……知り合いたくはなかった部類の友人だがな」

本気で嫌そうに語る千冬の顔を見て、四季はそれ以上の追求を止めた。

昔からの付き合いだとするならば、あの性格で散々困らされたことだろう。

どんなことで困らされていたのかは、あまり想像はしたくはない。そんな二人の関係を言葉で表すなら、『悪友』が相応しい。それはさておき、

「それとお前を襲ったという敵だが、恐らく束が自分を狙っている組織を利用して逆に呼び寄せたのだろう。お前と戦わせるために」

「やっぱりそうですか」

「気づいていたのか？」

「彼女は煌星の調整を終えた後、タイミングを見計らったかのように立ち去っていきました。その後に敵が来るなんて、偶然にしては出来すぎです。戦わせた目的は煌星の稼働データを取ることだったんでしょうか？」

「それだけではないだろう。あいつはお前にISの実戦の経験を積ませたかったのかもしれない。もちろん、お前が死なないように煌星の耐久値と防御力、敵ISの性能、操縦者の性格と技量、IS学園の制圧部隊が来るまでの時間 それらを全部計算した上でな」

ぞくり、と背筋が凍るような悪寒が走った。

一步違えば死んでいたかもしれないあの戦いが全て計算されていたもの。自分も敵も彼女の手のひらで踊っていたにすぎないというのだ。

そんなことできるはずがない、と思うが実際に束と会った後では千冬の言葉に説得力を感じてしまう。

「全部……篠ノ之博士の筋書き通りだった……？」

「ほぼ間違いないだろう。とはいえ、あいつとて神じゃない。全てが自分の思い通りになったとは限らない。計算外があったとすれば、お前が敵のISを墜としたことくらいか。まあ、束からすれば誤差の範囲内かもしれないが」

数時間前まで話していた子供のように無邪気な束が恐ろしいものに見えるてきた。

篠ノ之 束という人物がますます分からなくなる。

「それにしても、何で篠ノ之博士は俺にISを……？」

「そこまでは私にも分からない。というか、あいつのやることはいつも理解不能だ。理解もしたくもない。だが、自分が興味を持つもの以外無関心な束が何の理由も無くお前に会いに来るわけがない。ましてや、ISを渡したりなど絶対に有り得ない」

それは一つの事実を示していた。

四季は今日初めて束に会ったと思っている。だが、彼女はこう言っていた。

『他人に興味を持たないはずの私が一度会っただけの君に興味を持つなんて』つまり、あの時点で出会ったのは二度目ということだ。記憶を失う以前 五年前より前に、この世界のどこかで四季

と束は最初の接触を果たしている。
……
それも束が興味を持つほどの出会いだ。

「篠ノ之博士は……記憶を失う以前の俺と何らかの関わりがあった？」

「恐らくな」

世の中分らないものだ。

『IS』 昨日まで無縁と思っていたそれが、自分の過去に関わる重要な手掛かりだったのだから。
こんなおかしい話はない。

「……お前がISを起動させたことを知っているのは、私を含めた学園の教師数名と、お前が交戦した襲撃者だけだ。現場で起きたことは『プロパンガスを運んでいたトラックが事故を起こし、乗せていたボンベが全て爆破した』ということになっている。一夏の時と違って、今ならまだ引き返すことができる」

これは千冬なりの気遣いだ。

姉としては、出来ることなら弟には危険な世界に踏み込んで欲しくない。
はない。

一夏は引き戻すことはできなかったが、世間に知られていない四季はまだ間に合う。

だが、彼女は強要はしない。

過去に触れることなく平穏な日常に戻るか、失われた記憶を追い求め『IS』の世界に踏み込むか……どちらかを選択する権利があるのは当事者である四季自身だけだ。

「決断しろ、四季。どちらの答えであっても私はお前の選択を尊重

する

Part 4 『悪意なき悪意』

「……」

四季は自分が岐路に立たされていることを自覚する。

それも人生を左右するほどの、だ。

しかし、彼の答えは既に決まっている。否、初めから決めていたというべきだろうか。

「……千冬さん、俺は過去を求めます。自分が何者なのかを知るために」

「記憶が戻ることに抵抗はないか？」

「正直言えば……、でも俺は前々から決めていたんです。もし、生きている内に過去に触れる機会が訪れるなら、その時は迷わず向き合っていくこと」

「過去はお前の望んでいたものとは違うかもしれない。最悪、お前を傷つけるだけのものかもしれないぞ」

「だとしても、俺が俺であるために、そして前に進むためには、必要不可欠なものです」

千冬はジッと四季の目を見つめた。

決意を秘めた彼の瞳から迷いは一切感じられない。

「……決意は変わらないようだな。なら、私からはもう何も言つまり」

千冬は四季に背を向けるようにして椅子から立ち上がった。顔を背ける瞬間、四季は見た。一見無表情で分かりづらいが、どこか悲しげな雰囲気漂わせていた彼女の顔を。

「千冬さ……」

言いかけるが、止める。

ここで彼女に『どうして、そんな悲しそうにしてるんですか』と聞いてしまったら、固めていた決意が揺ぐことになりかねないからだ。

（千冬さんが何も言わないでいてくれるのに、俺がここで聞いてどうするんだ……）

自分で決めたことだ、と四季は心に言い聞かせ、開きかけていた口を無理矢理閉ざした。

幸い、こちらが何か言いかけていたことに千冬は気づいていない。

「さて、お前の処罰についてだが……」

ついに来たか、と四季は思う。

今、自分は犯罪者としてここに連れてこられている。

しかし、四季は束や襲撃者らの争いに巻き込まれた被害者的な立場にあるのだが、いかんせん四季自身そうは思っていない。

どんな事情や理由があるにせよ、法を犯したことに変わりはない。ゆえにそれ相応の罰を受けるべきだと彼は考え、覚悟している。

四季は千冬の口から続けて繋げられる言葉を待った。

「三日ほど、この学園に拘束させてもらう。悪く思うなよ」

「……………はい？」

しかし、処罰の内容に、思わず間抜けな声が四季の口から漏れた。

「え……………それだけですか？」

「不服か？」

「い、いえ、全然っ！ 不服だなんてことはないです！ 　ただ、あまりの罰の軽さに拍子抜けしたというか……………」

「まあ、罰と言ってもまだ確定ではないがな。三日というのは国際IS委員会に今回のことを報告と説明をするための……………言うなれば、お前の身の潔白を証明するための時間だな。市街地でのISの戦闘は確かに刑罰ものだが、今回は異例の事態だ。話を聞く限り、お前はどちらかと言えば被害者で、戦闘にしても正当防衛に当てはまる。無罪で収めてもらうよう、委員会に掛け合う。その際、条件を出されると思うがな」

『条件』という言葉に四季が反応した。

「条件って、もしかして」

「そうだ。IS^{（イ）}学園に入学することだ。ISに関わるのなら、入学する他ないのだから」

入学しなかった場合はどうなるのだろうと疑問に思うが、ISに関わる以上、千冬の言う通り入学する他ないのだから、無駄な質問だと思い、聞かないことにした。

「三日後には何事もなく学園に入学してるだろう。それまでに四季は準備を済ませておけ」

「準備？」

「入学前に覚えなければならないISの予備知識だ。参考書は今日中に用意する。拘束されている間に全部覚えておけ」

IS学園に入学する女子は皆、事前学習を受け、予備知識を身に付けていることが前提だ。

何故ならばそれが当たり前だからだ。

現在世界に存在するISのコアは全部で467個。その製造技術を知り、なおかつ造ることのできる者は篠ノ之 束以外おらず、彼女が造らない限りこれ以上コアの数が増えることはない。つまり、数が限られているということだ。

ISのコアは各国の国や企業に使われる研究及び開発、各国の軍事（有事の際の国防）のための量産型IS、各国の国家代表及び代表候補生に与えられる専用機IS　これらに割り振られて使われている。

個人でコアを所持するということはこの世界では名誉なこと、選ばれた存在　言わばエリートということあり、将来が約束されたも同然となる。

故に誰もが（女性のみ）ISの国家代表になろうと夢を見る。……が、なりたいたいと思ってなれるものではなく、また並大抵の努力では容易く弾かれてしまう厳しい世界だ。

国家代表以外にISに携わる職業（研究者やエンジニアなど）はもちろん他にもあるが、ISに関わる以上当然激しい。

ISは機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遙かに上回る『兵器』だ。その『兵器』について何も知らずに扱えば事故が起こるのは必至。故にIS学園に通う人間はその知識を身につけ、訓練を行うの

は当然であり、義務だ。

「まあ、拘束されている間は食事と寝る以外他にすることがなさそうですね」

「お前なら二日もあれば余裕だろう。一夏と違って、お前は物覚えが良いからな」

「ハハ、どうも。あ、そうだ。千冬さん」

四季の中である考えが不意に浮かび上がった。
今の自分に必要不可欠なものだという確信を得ながら、尋問を終えたことを報告しに部屋を出ようとした千冬を呼び止めた。

「二つほどお願いしたいものがあるんですけど……」

「お願いしたいもの？」

「ええ。剣や刀について詳しく書かれた本と国家代表同士のIS戦闘の映像 出来るなら、千冬さんの戦闘の記録映像をお願いしたいのですが……」

……

……

……

……

「……疲れた」

机とトイレと洗面台が設置された広さ約四畳の独居房。その狭い空

間を天井の電球が照らす。

四季は独居房に置かれてあるベッドの上に横たわりながら、疲労感を含んだ呟きを口から漏らした。

今日は色々なことが起こりすぎたのだから、彼が肉体的にも精神的にも疲労したのは仕方ないことだ。あまりにも疲れたのでこのまま寝てしまおうかと考えてしまっくらいだ。

しかし、四季は眠れないでいた。

気になることがあったからだ。

四季の頼み事を了承した千冬が部屋を出ようとした時、彼女もまた、思い出したように四季に尋ねたのだ。

『……四季、束と実際に会ってお前はどう感じた？』

『どう、とは？』

『何でもいい。お前が感じたことを言ってくれればいい』

『感じたこと、ですか……。正直、分らないです。今までに会ったことのないタイプの人でしたから。ただ……』

『ただ？』

『……悪意なき悪意って言えばいいんでしょうか。彼女は周囲に迷惑や混乱を与えると分かっているながらも、それが悪いことだと思っていないから平然と行える』

『……』

『俺は、そう思いました』

『……そうか』

それを最後に千冬は部屋を出た。
ホークとの戦闘時と千冬の話聞いた時に感じた束の本質。
四季は少なからずも、それに恐れを抱いていた。
しかし、

「……言うべきじゃなかった」

部屋を出る時の千冬表情からは何も感じ取れなかった。
しかし、自分の友人のことを悪く言われたのだから、嫌な気分を抱かせてしまったかもしれない。
自分も友人のことを馬鹿にされれば黙ってはいられない人間だ。
だから、彼は己の迂闊な発言に後悔している。あのまま黙っておけば良かったと。

「でも、何で……」

あのような質問をしたのだろうか。
そこが後悔と同時に抱いた彼女への疑問。

（何かあったんだろうか……）

考えるが、さっぱり分からない。
しかし、気になってしまうので考えてしまう。そんな不毛な悪循環に囚われていると、机の上に置かれていた携帯が鳴った。

「……誰だ、こんな時間に？」

机の上には千冬が持ってきた参考書数冊と頼んでおいた本とポータ

ブルDVDプレーヤー、そして自分の携帯電話が置かれてある。
ちなみに『煌星』は損傷が酷いらしく修理中とのこと。

二つ折りの携帯の画面を開くと、そこには『一夏』の着信文字が表示されていた。

「はい、もしもし」

それを見た時、四季は反射的に電話に出た。
しまった、と思うがもう遅い。

今日の出来事を決して口外しないように、と千冬に注意を受けている。

たとえ身内であっても話してはならない。

（聞かれても、話を合わせないとな……）

『あ、四季か。電話に出てきてくれて安心した』

「いきなり何だ」

『いや、ニュースで実家の近くにある公園で爆発事故が起きたって知ったから心配になってさ』

「……爆発事故？」

と、聞き返して、千冬が現場で起きたことを事故に偽装したことを思い出す。

『知らなかったのか？ ニュースじゃ、結構爆発音が響いてたらしいが……』

「ああ、そういえば花火みたいな爆発が外で響いてたような気がしたな。料理中だったから気がつかなかった」

この場を合わせるための苦しい嘘だったが、一夏は納得したようだ。

『なににせよ無事で良かった』

「……全くだ」

危うく死にかけたからな、と四季は思わず心の中で呟いた。

『……四季、何かあったのか？』

と、電話越しから伝えられる声から何かを感じ取ったのか、一夏が心配そうに尋ねてきた。
そのことに四季は思わず焦るが、悟られないよう先程と変わらない口調で返す。

「どうしてだ？」

『いや、さっきから、なんていうか……声に元気がないっていうか』

鈍いにもかかわらず、心の機微には鋭い。

そのことに四季は嬉しく思いながら、

「気のせいだ。　いや、一人で暮らしてるから、自分でも気づかない内に元気がなくなってるのかもな」

『ははっ、何だよそれ。お前らしくないぞ』

「……そうだな。そうかもしれないな」

いつの間にか沈みかけていた気持ちが少しだけ晴れた気がする。
同じ家族でも一夏と話すだけでこつも違うのだろうか、と四季はそんな風に思った。

『あ、千冬姉にはちゃんと連絡したか？ しなかったら、後で何言われるか分からないぞ』

「言われなくても連絡済みだ」

『そうか。ならOKだ。それじゃそろそろシャワー浴びるから切るぞ』

「ああ。近い内にまたな」

『おう』

再会の意味を含ませる言葉を一夏に伝えた後、四季は電話を切る。

「さて、やるか」

気力と体力が少しだけ回復した四季は机の前に座り、一番上に積み重ねた参考書を手に取り、その中身を記憶に刻みつけ始める作業に取り掛かった。

彼が一夏と再会する三日前の夜の出来事であった。

Part 5 『一夏のファースト幼馴染』

キンコンカーンコン

四時限目の授業の終わりを告げるチャイムの鐘が学園内に響き渡る。それは同時に昼休みの訪れを意味していた。

「今日はここまでとする。復習を忘れないように。次の授業では戦闘動作の応用について説明をする」

『IS基礎戦術学 Vol.1』の教本を閉じ、退室する千冬さんにクラスメイト達が「ありがとうございます」と礼をする。もちろん、俺も礼をすることを忘れていない。

千冬さんの姿が見えなくなったことを確認した俺は手を組んで首と背を伸ばし、授業の間同じ姿勢で居続け、凝り固まった体をほぐした。

千冬さんが直に授業を行ったためか一時限目と違って、妙に緊張してしまい、心身が共に人一倍疲れてしまった。

転入初日なのだから仕方ない。徐々に慣らしていけばいい。そんな言い訳じみたことを考えていると、

「おーい、四季ー」

こちらを呼ぶ一夏の声が聞こえる。組んでいた手を離して、姿勢を戻して前を見ると、一夏が傍に近づいていた。

「昼飯、一緒に食べに行こうぜ。ここの食堂の場所、まだ知らないだろ？」

そういえばそうだ。

参考書を手渡された時、IS学園の概要案内書も貰っているが、そこらにはまだ目を通していない。拘束されていた間、参考書と映像記録を見ることに時間を費やしていたためだ。

今のところ、独居房から教員に案内された職員室、職員室から山田先生と千冬さんと一緒に来た教室までの道筋しか記憶していない。ちなみに独居房の存在は一般生徒には知られていないため、千冬さんに固く口止めされている。

「じゃあ、案内よろしく頼む」

そう返事をする、一夏は『任せろ』と頷いた。

「他に誰か一緒に行かないか？」

一夏が周囲の女子に昼食の誘いを振る。

恐らく、転入してきたばかりの俺に気を遣ったのだろう。

「はい」

「行くよっ！」

「おりむー、私も行く」

「私も行きますわ」

一夏の誘いに返答する女子の声。

布仏さん、谷本さん、鷹月さん、セシリアの四名だ。

「第も行くつぜ」

「……ああ」

ポニーテールの少女は一夏の誘いに対してどこか不機嫌さを含ませた返事をする。

彼女は

「あ、そっぴや四季にちゃんと紹介してなかったな。名前と顔はもう覚えてると思うけど、一応な。篠ノ之 篁。前に話したことがあっただろ？」

「小学校から幼馴染だろ？ ちゃんと覚えてるさ」

姓名が珍しいものだったので、彼女が以前一夏が話していた小学校低学年からの付き合いで、ファースト幼馴染である『篠ノ之 篁』であることはクラスの席表で名前を見つけた時から予想がついていた。

それにしても、気のせいだろうか。さっきから彼女が俺を見ているというか、睨んでいるような気がする。

とりあえず、まずは挨拶だな。

「よろしく、篠ノ之さん」

「……」

手を差し出して、握手を求める。……が、彼女はこちらを睨むように一瞥した後、こちらの握手を無視した。

「……先に行ってるぞ」

「お、おいつ、篁！」

一夏の制止の声掛けも虚しく、彼女はポニーテールに結われた長い

髪を揺らしながら教室から出て行ってしまった。

「何ですの、今の篠ノ之さんの態度は。失礼にも程がありますわ」

誰の目から見ても非のある態度を取った篠ノ之さんにセシリアは憤慨し、他の女子達は困惑していた。

「箒の奴、何で怒ってるんだ？」

四季に対して冷たい態度を取った彼女に一夏は首を傾げていた。

何故あんな態度を取ったのか本当に分からないのだろう。

馴れ馴れしく握手を求めたのがいけなかったのだろうか、それとも彼女が単に男嫌いなだけなのか？

「普段はあんな態度を取るような奴じゃないんだけど……悪い、四季」

一夏は本当に申し訳なさそうに頭を下げた。

「気にしていないから、大丈夫だ。俺たちも食堂へ行くか」

全く気にしていないように振舞ってみるものの、流石に初対面で嫌われると……流石にちょっとキツいな。

俺達はセシリアを含めた女子四人と共に食堂へと歩いていく。
隣で歩く四季の顔は変わらず無表情で先程の箒の態度を気にしていないように見えるが、どこか陰が掛かっている上、足取りも遅いように見える。家族だからこそ分かる微細な変化だ。

さつき、箒に冷たい態度を取られたからだろう。四季って意外と繊細だからな。

（それにしても……）

箒の態度がどうしても気になったので、先を歩く箒の横に走って追いつく。

心無しか妙に歩く速度がいつもより速い気がする。まるで四季から距離を取ろうとしてるみたいだ。

「箒」

「……」

一度の呼び掛けに箒は足を止めない。

「おい、箒。待てよ」

「……」

二度目の呼び掛けにも箒は足を止めない。

「おい、箒さん。もしもーし」

「……」

三度目の呼び掛け……こ、ここまで無視されると流石の俺もへこむぞ。

しかし、どうして箒があんな態度を取ったのか理由が知りたかったので、俺はしつこく声を掛け続けた。

「箒、どうしたんだよ急に。何怒ってるんだ」

「……別に怒ってなどいない」

やっと答えたと思ったたらそれか。

眉間に皺を寄せながら答えられてもな……。

「いや怒ってるだろ、どう見ても。四季と何かあったのか？」

「何もない」

「じゃあ、何で四季にあんな態度を取ったんだよ」

「それは……」

続きの言葉を言い淀む箒。何故かこちらを一瞥 いや、睨んでい
る。

何だ、俺の顔になんか付いてるのか？

「とにかく、私は怒ってなどいない」

結局箒はちゃんとした理由を答えようとはしなかった。
そのことに俺は少し怒りを覚えて、

「箒」

「しつこいぞ、一夏！ 私は怒ってなど」

「俺、今の箒嫌いだ」

「え……」

俺の言葉に箒は足を止めた。まるでこの世の終わりを迎えたような顔をこちらに向けてくるが、俺は構わず言葉を繋げた。

「箒が人付き合いが苦手なのは知ってるさ。けど、こんな風に人を嫌う奴じゃなかったはずだ」

素直じゃなくて不愛想で人を寄せ付けないオーラを常に醸し出し、けれども理由もなく人を拒絶したりしない。それが俺の知っている篠ノ之 箒という幼馴染だ。

六年の間に箒は変わってしまったというのだろうか。けれど、一ヶ月前に再会した時は変わってなかったし……何が原因でこうなったのか全然分からない。

「……私だって、こんなつもりでは……っ」

箒が何か呟くが、声が小さすぎてよく聞き取れなかった。

「……私がいては折角の昼食も台無しだろう。今回は辞退させてもらっ」

もう一度尋ねようと思った時、彼女は顔を俯かせながら言うと、走り去ってしまった。

「あっ！ 箒！」

後を追いかけるが、廊下の角を曲がった時には箒の後ろ姿はどこにも見えなかった。

探そうと思ったが、四季達のこともあるし、今の幕を見つけた所で彼女は同席を拒否するだろう。

仕方なく、俺は四季達と合流すべく、食堂へと向かった。

.....

.....

.....

.....

「　　美味しいな、このチャーハン」

レンゲで一口分すくったチャーハンを頬張り、その味に舌鼓を打ちながら四季が嘆声をもらした。

「　　だろ？　　IS学園（こい）の食堂の昼食のメニュー、チャーハンに限らずどのメニューも美味いんだぜ。けれど、俺は日替わり定食がオススメだな。メニューにはないものが食べられる楽しみがあるし」

ちなみに俺が初めて日替わり定食を選んだ時のおかずはチキン南蛮だった。添えられたタルタルソースは食堂のおばちゃんのオリジナルらしく、チキン南蛮との組み合わせは最高。絶品だ。

「それにしても、流石はIS学園。まさかこれほどメニューが豊富だとは」

四季の言葉にセシリアが答えた。

「現在IS操縦者育成機関があるのは日本にあるこのIS学園だけですから、どの国の方が来られても生活面において対応できるようにしているでしょう。滅多にはありませんが、些細なことで文句

を言う輩もいるにはいますし。まあ、私はそんなことはありませんけれど」

クラス代表決める時、『文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとつては耐え難い苦痛で』とか日本に対して否定的なことを言つてたような気がするけど、今はそんなことはないようだ。

そんな風にサンドイッチを食べるセシリアを見ると、四季が唐突に尋ねてきた。

「……なあ、一夏。篠ノ之さんのことは本当に良かったのか？」

「ん？ ああ。俺も気にはなるんだけど、今はそつとしておいた方がいい。無理に連れてきても気まずくなるだけだろうし」

「……そうか」

とは言うものの……このまま二人を仲違い（一方的に篤が嫌つてるだけなんだが）させたままにしておくのは良くないよな。何かキツカケがあれば……。

「そついえば、一夏。鈴もIS学園に転入してきたつて言つてたよな？ 俺、ここに来てからまだ一度も会つてないんだよな」

ハッ！

そ、そうだった。四季の転入ですつかり忘れてたけど、こっちも鈴と喧嘩してゐるんだつた！

こっちも約束を覚えてないとかで鈴が一方的に怒つてるだけなんだけど。

ちゃんと約束覚えてたのに……何か間違えてたのだろうか？

そんな風に考えながら、目を横に向けてみると、

「あ」

噂をすればなんとやら。ツインテールの少女　　鈴がラーメンを乗
せた盆を持ってそこにいた。

Part 6 『一夏のセカンド幼馴染』

「あ」

と、一夏が声を上げて目を向けた先を見ると今まさに噂していた人物が立っていた。

凰 鈴音 俺と一夏が小学五年の頃に転校してきた、一夏曰く『セカンド幼馴染』。

ツインテールの髪型と小柄な体型が特徴的な彼女だが、久々に会ったからだろうか、どこか成長しているように思えた。

そう思うのは自分の記憶にある鈴と今日の前にいる鈴を比べて、微妙に違和感を覚えるからだろう。

最後に会ったのは約一年だから、その間に成長していても別に不思議ではない。

しかし、鈴が転入してきた頃に一夏と電話で会話をしていた時

『今日鈴がIS学園に転入してきたんだ。びっくりしたよ、全然変わってないんだもんな、アハハハッ』

と、一夏は笑いながら話していたので、彼女の変化には全く気がついていないどころか、昔のままだと思っっているようだ。鈴もかわいそうに。

「！」

ふと突然、鈴の目が一夏の目と合った。何か話すだろうかと思っていたのだが、

「……ふんっ！」

不機嫌そうに顔を背けて、彼女は一夏が座っている場所から離れていった。あの様子だと俺に気づいていないようだ。離れゆく彼女の背中を見ていた一夏は溜息を吐いた。そんな二人の様子から、一つの予測が容易に浮かび上がった。

「一夏、鈴と喧嘩したのか？」

一夏が力なく首を縦に振って、肯定した。相変わらず分かりやすい二人である。

「原因は？」

「……それが全く心当たりがないんだよなあ」

心当たりがない？ そんなはずがない。

喧嘩が起きる原因がなければ、『一夏と鈴が喧嘩している』という現状には至ってないはずだ。

「本当に分からないんだって。鈴が転校してきた日にあいつが突然俺の部屋に押しかけてきた時があって」

「お、押し掛けてきたっ！？」

説明の途中にセシリアが席を立てて反応した。当然ながら、その大きな声に何事かと周囲から視線が彼女に向けられた。

「な、なんでもありませんわ。オホホホホ……」

そのことに我に返ったセシリアは何でもないように振る舞い、席に座った。（正しくは顔を赤くして縮こまった）
それで？ と俺は一夏に説明の続きを促させる。

「鈴が押しかけてきて、箒とひと悶着を……って、これは関係ないか。まあ、鈴が突然『約束覚えてる？』って尋ねてきたんだ」

うん、と相槌を打つ。

「で、何か約束したかなと、頭を捻ってみたら、鈴との約束をなんとなく覚えてたんだ。それで答えたら」

「答えたら？」

「頬をぶたれた」

……ちよつと待て。それって

「その約束の内容をちゃんと覚えてなかったのが原因だろう、どう考えても」

「いやいや、覚えてるんだって。『私の料理の腕が上がったら、毎日酢豚を奢ってあげる』
って鈴が言っただよ。間違いなく」

それを聞いた時、記憶という本棚から過去の会話記録が引き出された。

内容は小学六年生の頃の織斑家での一夏との会話。
記憶の中の一夏は満面の笑みを浮かべながら、『四季、聞いてくれよ。鈴が料理の腕上がったら、酢豚を毎日ご馳走してくれるんだっ

て。楽しみだなあ』と、確かに小学六年の頃に喜々として俺に話していた。

確かに一夏は鈴との約束を覚えている。

「なのに、鈴はちゃんと覚えてないって怒るんだ。酷い話だろ？」

鈴は怒りながら、犬に噛まれて死ねって言うてくるし、筭には馬に蹴られて死ねって訳の分からんこと言われるし、マジであの時の夜は散々だったぜ……」

話を聞く限り、一夏に非がない。俺も理不尽だと思うけれど

「それにしても、後ろめたいことがあるような顔してるよな？」

鈴と顔を合わせた時から、一夏はどこか彼女に対して申し訳なさそうな表情を浮かべていた。

自分に非がないのなら、鈴に対して思い悩む必要はない。少なくとも一夏はそうだ。

「うつ……それは……その……」

一夏は右手で頭を押さえながら、ばつの悪そうに答える。

「……鈴が出ていく直前、目に涙を浮かべてた……」

ああ、それでそんな顔してたのか。納得。

「つまり、泣かしたと？」

「……うん。いや、俺も流石にそれは悪いとは思ってるんだけど、

何で泣いたのかさっぱりで……」

二人が交わした約束……。

約束を覚えている一夏……。

覚えてないと涙を浮かべながら怒る鈴……。

二人の間で何故食い違いが起きているのか、これらのキーワードを元に俺は思考を巡らせた。

そもそも、鈴が怒ったのは一夏が約束を『覚えていない』ことが原因だ。

だが、一夏は『覚えている』と言う。

これでは矛盾し、食い違いが起きるのは当然だ。では、この矛盾の原因は何か。

もう一度、約束の内容を思い出してみよう。

『私の料理の腕が上がったら、毎日酢豚を奢ってあげる』

料理の腕……毎日……酢豚を奢る……。

奢るってことは作って食べさせることだから、そう考えると あ

あ、そういうことか。

パズルのピースがはまった時のような快感を得ながら、矛盾の原因が判明した。

それは約束を交わした相手 一夏にあった。

なので、

「一夏が悪い」

何故鈴が一夏とそんな約束を交わしたのか、よくよく考えてみれば簡単なことだった。

付き合いが長い癖に、こんなことにすぐ気がつかないとは……我ながら抜けている。

「即答かよ！ ……けど、やっぱりそうだよなあ。俺が怒らせて泣

かせたんだから、どう考えても俺が悪いよな。けど、謝る原因が分からん以上、謝りようがないし……」

「一夏は原因に納得できれば謝るのか？」

「そりゃもちろん。でも、鈴が今あんなだから話ができないんだよな。そもそも、向こうから“話しかけてくんないオーラ”出してるし」

その辺りも相変わらずか。

鈴は喧嘩などをして機嫌が悪くなると、その相手に対して数週間口を聞かない状態になることがある。

目を合わせば逸らし、話しかけようとすれば無視し、近づけば距離を取って威嚇する。

野生の猿のようで実に対処が面倒な女子である。もともと、鈴がこの状態になるのは一夏に対してのみだが。

「だからと言ってこのまま放っておくわけにもいかないだろ。俺が話を付けてやる。丁度、鈴と話がしたいと思ってたし」

俺がそう言つと、一夏は目を輝かせた。

「本当か！？ サンキュー助かる！」

「貸し一つだからな。それじゃ、また後で」

「うん、また後でね」

ブンブンと手を振る布仏さんを含む昼食メンバーに見送られた後、食器を乗せた盆を食器置き場に戻して、鈴の元へと向かった。

「はあ……」

わいわいと歓談や雑談などで女子達が賑わう食堂の中、食堂の片隅のテーブル席でツインテールの中国人少女こと凰 鈴音 通称『鈴』 が溜息を吐きながら、ずると麵の啜っていた。

席の周囲には他の女子の姿は見当たらず、彼女一人で占領している状態にあった。

説明しておくが、鈴がIS学園に転入して数週間が経過している現在 彼女には友人が出ないわけでもなく、ましてや周囲から浮いているわけではない。

では、何故一人なのか？ 理由は簡単だ。鈴が一人で食事することを選んだからだ。

というのも、鈴が醸し出す不機嫌オーラのせいで友人達は昼食に誘おうにも誘えないでいた。鈴としても一人になりたい気分でもあったので、本人としては丁度良かった。

しかし、昼食に誘おうとしてくれているにもかかわらず、それを拒んでいることに鈴はクラスの友人達に申し訳なく思った。

（あたしが一人で食事を取ることも、みんなに申し訳なく思つのも一夏があたしとの約束を覚えていないせいよ！ そうよ、全部あいつが悪いんだわ！）

一方的な逆恨みであったが、一夏にも原因があるといえがあるので彼女の怒りはあながち間違っではない。どちらにしても理不尽ではあるが。

ずるる、と周囲を全く気にせず、音を立てて麵を啜る鈴。十代の乙女らしからぬ行為だが、本人が恥ずかしく思っていないので問題はないのだろう。

それよりも本人が今考えているのは、

（……でも、あれから結構経つのに、一夏、全然話しかけてくれないのよね……。やっぱり、言いすぎたのかな……）

流石に気まずい関係になりつつあることに鈴は不安を抱き始める。単に一夏が話しかけないのは先述の不機嫌オーラのせいだ声掛けづらいためと、鈴自身が一夏と話すことを拒んでいるからなのだが、残念ながら本人にその自覚は無かった。

（……意味は違っていたけれど、よくよく考えてみれば、一夏があの約束を覚えていただけでも上出来よね。それを考えたら、許してあげても……）

と、そこまで思っただけ鈴はハツとなって首を横に振り、先程の考えを即座に否定した。

数週間、一夏と話せていない寂しさ故に許す方向へと偏りかけていた心が、乙女のプライドによって寸前で思い止められてしまった。

（いやいや、ダメよ、凰 鈴音！ ここで折れたら相手の思う壺。一夏が調子に乗るだけ。向こうが謝ってくるまでは許しちゃ）

「イライラしながら食べても美味くないだけだぞ？」

突然声を掛けられた鈴は考え事を中断された苛つきから、思わず怒りを含んだ視線をその方向に向けながら攻撃的な口調を言い放った。

「うつさいわね、どう食べようとあたしの勝手　　！？」

その人物を目の前にした瞬間、視線に含んだ怒りが驚愕に変わり、

口の動きも止まった。

何故なら 彼女にとっては、ここにいるはずのない友人 新永

四季がそこに立っていたからだ。

鈴は啞然と口を開いたまま四季を見つめるが、彼はそんなことを微塵も気にしていないのか片手を挙げながら笑顔で再会を意味する言葉を紡いだ。

「久しぶりだな、鈴」

四季の挨拶でようやく我に返った鈴は改めて四季の存在に驚いた。

「し、四季！？ あんた、何でここに！？」

「お前、本当に気づいてなかったのか。相変わらず、一夏のことだけしか興味ないのな」

やれやれ、と四季は呆れるように肩をすくめた。

一方で図星を刺された鈴はカァーと頬を赤く染め上げながら「う、うっさいわね」と返す。

そんな約一年振りに再会した友人の変わらぬ中身に思わず口が緩まる。

「聞いたことないか？ 一夏の他にもう一人ISを動かせる男の話」

鈴の正面になるよう席に座りながら尋ねる四季。鈴が何も言っていないので、彼はそれを了解の意として受け取った。

「それは聞いたことはあるけど、まさかあんなのことだったなんて……世間は狭いわね」

「同感だ」

ずるる、と鈴は麵を啜る。

数分前まで鈴の体から出ていた不機嫌オーラはいつの間にか霧散していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6522r/>

IS インフィニット・ストラトス ~Fatal Striker~

2011年11月12日16時34分発行